

イギリス文学・文化論ゼミ



海外語学研修 フィールドワーク 報告書

<編集者・報告者>

阿部幹正 石井玲央菜

大木頑生 小野詩織

菊川奈芳 三仙淳誠

高野滉平 早村名奈

まえがき

本報告書は、2017年度「イギリス文学・文化論演習」（加藤ゼミ）における、海外語学研修及び海外フィールドワークとその事前・事後学習をまとめたアクティブ・ラーニングの活動記録である。3年次生は8月にケンブリッジにあるアングリア・ラスキン大学にて **English Language and Culture** という語学と文化を学ぶサマーコースを2週間受講し、その後ロンドン、エディンバラ、オックスフォードにて9日間のフィールドワークを行った。「演習」とは別の時間に週1コマ、前期期間中に事前学習を行い、訪問先の文化、歴史、及び各自のフィールドワークにおける調査トピックに関する発表とディスカッションを行った。後期は、事後学習として調査トピックに関する追跡調査を文献やインターネットを通じて行い、「フランス文化論演習」（平松ゼミ）との合同発表会において、各自の調査研究に関する発表を行った。そして1年を通じたアクティブ・ラーニングの総括として、春休み中に本報告書を執筆、編集した。

前年度の学生達はいずれも海外での調査研究を卒業論文へと発展させ、海外での学びと経験を4年次での研究へと繋げている。そして3年次での海外体験が4年間の大学生活での最も貴重な経験であったと卒業時に振り返っている。海外での調査研究をそのまま卒業研究へと繋げる必要はないが、その経験が今後の人生の大きな糧となることが今年度の学生たちにも期待される。この報告書作成も卒業研究に繋がる大事なプロセスの一つである。各自が責任を持って作業を行ったことはこの学年の向学心と結束力の高さを示していると言える。

(加藤 千博)

<旅程表>

日	月日		行程	訪問地	目的	宿泊
1	7/29	土	成田(17:05)発→香港経由	キャセイ航空		
2	30	日	ロンドン・ガトウィック(6:30)着 →ケンブリッジ	ケンブリッジ	移動、チェックイン	アングリア・ラスキン大学寮
3~7	7/31~8/4	月~★	アングリア・ラスキン大学	大学	サマーコース受講 (語学&文化研究)	アングリア・ラスキン大学寮
8	8/5	土	スクール・ツアー	ロンドン	近隣都市訪問	アングリア・ラスキン大学寮
9	6	日	自由行動	ケンブリッジ	市内フィールドワーク	アングリア・ラスキン大学寮
10~14	7~11	月~★	アングリア・ラスキン大学	大学	サマーコース受講 (語学&文化研究)	アングリア・ラスキン大学寮
15	12	土	ケンブリッジ→ロンドン	大英博物館、ディケンズ博物館	歴史・文学・文化	ロンドン大学寮 (International Hall)
16	13	日	ロンドン市内	グロープ座、V&A博物館	演劇・文化	ロンドン大学寮 (International Hall)
17	14	月	ロンドン市内	ナショナルトラスト	環境・文化遺産保護	ロンドン大学寮 (International Hall)
18	15	火	ロンドン→エディンバラ	エディンバラ大学、エジンバラ城	教育・歴史	エディンバラ大学寮 (Baird House)
19	16	水	エディンバラ	エディンバラ・フェスティバル	文化	エディンバラ大学寮 (Baird House)
20	17	木	エディンバラ→オックスフォード	オックスフォード	移動、チェックイン	オックスフォード大学寮 (Christ Church)
21	18	金	オックスフォード市内	ブレナム宮殿	歴史・文化・階級社会	オックスフォード大学寮 (Christ Church)
22	19	土	オックスフォード市内	コレッジ巡り	歴史・文化・文学・教育	オックスフォード大学寮 (Christ Church)
23	20	日	オックスフォード→ロンドン・ヒースロー空港/ロンドン(18:20)発 →香港経由	キャセイ航空		
24	21	月	→羽田(21:35)着			

Contents

1. Preparatory Research	…1
2. Summer Course “English Language and Culture” at Anglia Ruskin University	…11
3. Field Work Presentations	…15
4. Results of “Brexit” Interviews	…49
5. The diary	…54
6. Photos	…62
7. Reviews	…69

1. Preparatory Research

(1) London



<基礎情報>

- ・イングランドの首都であり、国際都市である。移民の多さから「人種のるつぼ」と表現されることもある。イギリス全体の移民の数は、約 854 万人（2015 年）で世界第 5 位。ロンドンにおいて約 1/3 が外国出身者であるとも言われている。
- ・2016 年における渡航者数は 1988 万人で世界第 2 位である。
- ・ロンドン内にはロンドン塔、マリタイム・グリニッジなどの世界遺産も存在する。

○大英博物館



- ・人類の文化遺産の殿堂とよばれ、収蔵品は約 800 万点。
- ・古今東西の収蔵品があり、略奪品も多く存在するため、「泥棒博物館」などと揶揄されることもある。
- ・収蔵品の多くが個人の寄贈品で、入場料は無料である。

○バッキンガム宮殿



- ・元来バッキンガム公シェフィールド邸として建設されたが、ジョージ3世により購入され、改装を経て、ビクトリア女王即位よりイギリス王室公式の宮殿となった。
- ・ロイヤルファミリーが諸外国からの賓客を迎える際の迎賓館としても使用されている。
- ・4月から7月までは毎日1回、それ以外の月は2日に1回ずつ衛兵交代が行われる。

○トラファルガー広場



- ・1805年のトラファルガーの海戦の勝利記念として造られた広場。戦いで殉死したホレイショ・ネルソン海軍提督の功績をたたえるため、銅像が建てられている。
- ・周辺にはナショナル・ギャラリーや若手のアーティストによるパフォーマンス等、芸術に関するものも多く存在する。
- ・ウィリアム・モリスの『ユートピアだより』において、革命の発端の出来事が起こった場所として登場している。

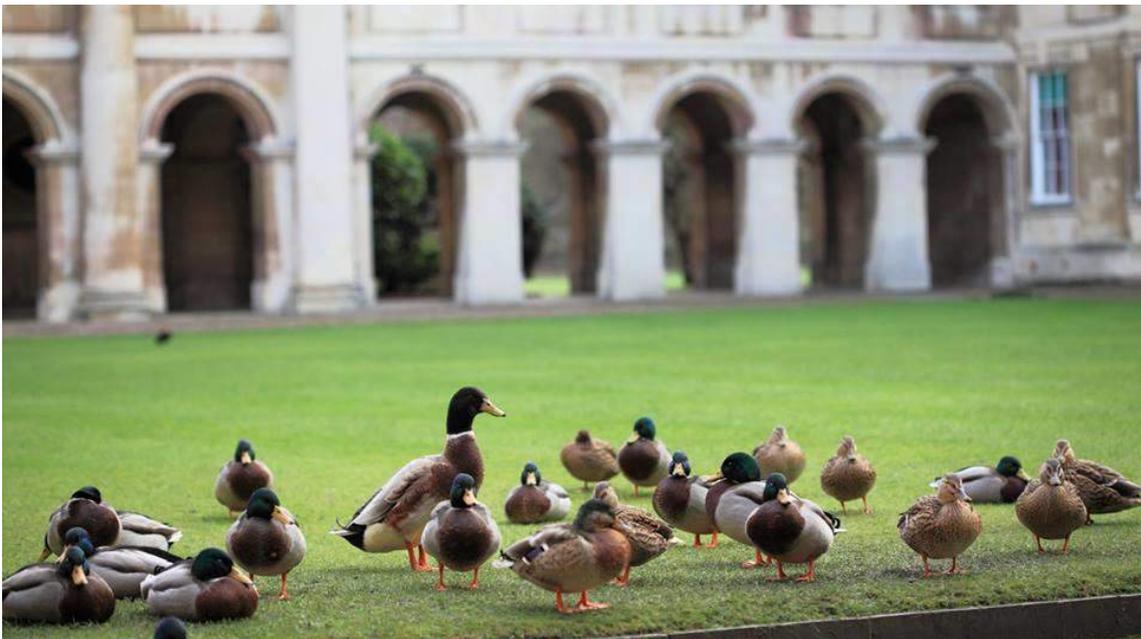
○Cockney

- ・セント・メアリー・レ・ポー教会のある地域で生まれた人のことを指す言葉。その人々のユニークな話し方がコックニー訛りである。
- ・Cockney のスラングは東ロンドンの労働者の話し方から始まった。

○RP (received pronunciation)

- ・オックスブリッジ英語やクイーンズイングリッシュがこの発音である。
- ・イギリスの標準英語とされるが、イギリス国内で話す人の割合はわずか 2 パーセントにすぎない。
- ・イギリスサッチャー元首相が取得しようとしたことで有名。

(2) Cambridge



<基礎情報>

- ・イングランド東部にあるケンブリッジシャーの州都。ロンドンからバスで2時間、電車で最短 45 分程度の距離にある。
- ・ケンブリッジを本拠地とするケンブリッジ・ユナイテッドFC という 4 部リーグ所属のサッカークラブチームがある。
- ・大学都市としても有名であり、ケンブリッジ大学の出身者には著名人が多く存在する。

○労働

- ・町全体がなだらかな地形であり、降水量も少ないため、農業が盛んである。
- ・2010年に世界で最も美しい都市ランキング第11位を獲得し、サービス業も活性化している。
- ・大学と連携をとったハイテク産業に力を入れている。シリコン・フェン（ケンブリッジクラスタ）と呼ばれるハイテク産業の中心地には1000以上の企業が存在する。

○ケンブリッジ大学



- ・世界大学ランキング（2016-2017）において第4位である。
- ・著名人を多く輩出しており、代表的な人物として、アイザック・ニュートン、スティーヴン・ホーキング等の科学者が多く、高い理系の功績を誇る。
- ・オックスフォードの教授や学生が移動してきたことにより設立された大学。
- ・IPR（知的所有権）制度により、大学と企業の連携を行うようになり、ハイテク産業都市としても名を知られるようになった。
- ・31の**カレッジ**が存在し、ラウンド・チャーチなどの価値のある建物も多く存在する。

※カレッジ制

- ・すべての学生は1つのカレッジに所属し、入学選抜もカレッジごとに行われる。19世紀半ばまでは教員は英国国教会徒であること、生涯独身であることが義務付けられていたが、現在では国教会に限らず、カトリックやプロテスタントなどのカレッジも存在する。
- ・学部での授業とは別にカレッジ内のチューターによる少人数の学習指導が行われる。

る大学対抗戦 (Varsity) を行っており、勝利数を双方で競っている。特にラグビー、クリケット、ボートレースの注目度が高い。

- 2015 年から 2016 年にかけて入学した黒人の割合は全体の 1 パーセント程度であり、その要因として、階級制度が挙げられる。ケンブリッジはアップークラス御用達の大学であるため、黒人の数が少ない。そのために、ケンブリッジ大学に対するステレオタイプを消し去ることや、奨学金などのシステムの推進が必要とされている。

○アングリア・ラスキン大学



- 735 の専門コースを持つ大学。1858 年に開校した Cambridge School of Art から派生したため、アート、デザインのコースが多いが、コースは文理問わず多岐にわたる。
- ビジネス・スクールは政府から東イングランド 1 の評価をもらっている。
- ロンドンから 1 時間以内の場所に位置する。
- 学生数は約 4 万人で、2016 年の世界大学ランキングにおいてイギリス国内で 35 位になった。
- キャンパスは国内だけにとどまらず、シンガポール、インドネシアなどにも存在する。
- Cambridgeshire College of Arts and Technology and the Essex Institute of Higher Education が参加したことにより、Anglia Polytechnic となり、1992 年に大学となった。2005 年に 19 世紀のイギリスを代表する評論家である John Ruskin から名をとり、現在の Anglia Ruskin University と名を改めた。

(3) Oxford



<基礎情報>

- ・オックスフォード大学の拠点であり、大学都市として有名。同様に姉妹都市にも、大学都市が多い。
- ・大学の中に町があると評されており、大学に関係した建造物等が多く存在する。

○ファッション

・オックスフォード・シューズ

フィット感を高めるために甲の部分にひもを通した革靴のこと。甲革が靴全体が一体化するように縫い付けられたバラモラル（内羽根式）と甲革が靴に羽根のように縫い付けられたブラッチャー（外羽根式）がある。1665年ごろオックスフォードの大学生が履くようになったことからオックスフォード・シューズという言葉が誕生した。

・オックスフォード生地

・シャツの生地。経糸・横糸を2本ずつ引きそろえて、平織りにした生地。厚手で光沢があり織目がはっきりしている。通気性がよく丈夫。トーマスメイソンオブネルソンという生地ブランドが四大大学（オックスフォード・ケンブリッジ・エール・オックスフォード）にちなんで大学生に好まれる生地を作り、結果的にこの生地のみ世界中に広がることとなった。

○産業

・Oxford Economics

オックスフォード大学ビジネスカレッジであるテンプレトンカレッジとの協業。経済予測と計量経済モデル構築のサービス、世界経済モデルや、産業モデルなどの分析・予測レポートの提供を行う。

・Oxford Instruments

研究や産業用のアプリケーションに焦点を絞ったハイテクツールやシステムを設計・提供している。オックスフォード大学の研究所からスピナウトして独立した最初のテクノロジー関連企業。

・Morris Motor Company

初代ナフィールド子爵であるウィリアム・モリスが自動車製造メーカーとして創業。自動車工場をオックスフォードのCowleyに建設。最初はほとんどの部品を他者から買い入れ組み立てのみであった。1924年、イギリス・フォード社を抜き、51%の国内シェアを誇るまでになった。現在は中国に吸収されている。

○オックスフォード大学



- ・世界大学ランキング（2016-2017）第6位
- ・11世紀末に大学の礎が築かれたことから世界で3番目に古い大学である。
- ・著名な輩出者として、マーガレット・サッチャー元首相やデイヴィッド・キャメロン元首相などの政治関係者が多

くおり、皇太子等日本の皇族の留学先でもある。

- ・39のカレッジを持つ。

・大学内における性革命

（前提）イギリスにおける性解放への取り組み

- ・性別変更をするのに外科手術などの医療公費が不必要である。

- ・世界で初めて「中性」という名目で出生届を提出することが可能。
- ・大学におけるトランスジェンダーへのいじめをなくすために、政府と大学が連携。

◎オックスフォード大学における性改革

- ・サブファスクと呼ばれるオックスフォードの正装におけるスカート、パンツ、リボン等の許可を行った。これは 850 年続く歴史の大革命であった。
- ・“he” や “she” に代わる 3 人称として “ze” を採用。これを行うことにより、男性、女性の種類分けをしないアイデンティティを尊重。

(3) Edinburgh



<基礎情報>

- ・スコットランドの首都でスコットランド第 2 の都市。
- ・エディンバラ大学は、アダム・スミスやチャールズ・ダーウィンを輩出した、英国で 6 番目に古い大学である。
- ・独自の通貨が流通している。

○SSE (Scottish Standard English)

・スコットランドの中流階級の人々の間で話されている英語のことを指す。17 世紀にスコットランド語を話す人々が北イングランド人と接することで始まった。

※スコットランド語

ゲルマン語派に属し、スコットランドのローランド地方において、約 150 万人に話されている。独特の訛りを持ち合わせており、ノルウェイ語と密接な関係がある。

○OLD CITY



- 中世の街並みが残っている。
- 旧市街の目抜き通り（ロイヤルマイルからエディンバラ城とホリールード宮殿を結ぶ道）の距離がちょうど1マイルである。この道は王族がエディンバラ城から宮殿まで移動の際に使った道である。

○エディンバラ・フェスティバル



- 1947年 Edinburgh International Festival が「人間精神の開花」を目的として初めて開催され、以降エディンバラが the Festival City として広く知られるようになった。現在、1年を通して様々な芸術にまつわる多くのフェスティバルが開催されている。
- 夏には7つのフェスティバル（Edinburgh International Festival, Edinburgh International Film Festival, Edinburgh International Jazz and Blues Festival, Edinburgh Art Festival, Royal Edinburgh Military Tattoo, Edinburgh Festival Fringe, Edinburgh International Book Festival）が開催され、うち6つが8月に同時開催される。その際、訪れる人や出演者は数十万人にもなる。

まとめ

事前調査において、ロンドン、オックスフォード、エディンバラ、ケンブリッジについて各自の関心事について調査を行った。そのため、ジェンダー、言語、ファッション、大学等、ゼミ生同士で内容が異なるもののそのおかげで新たな観点から自分の研究テーマについて考えを深めることができた。特に、大学という観点についての調査が多く、オックスブリッジと呼ばれる2大学についての興味深い調査結果が得られた。

大学都市と呼ばれるオックスフォードとケンブリッジについての事前調査において、それぞれの大学や、イギリスの大学制度について知ることができた。特に、世界でもトップレベルの大学である、オックスフォード大学とケンブリッジ大学（通称：オックスブリッジ）がオックスフォード大学の教授や学生がケンブリッジへ移動したことによりケンブリッジ大学が設立されたという歴史から対立の関係にあることが大変興味深かった。それとともに、イギリスにおいて優秀な大学が多く存在するのも、この2つの大学が切磋琢磨しあうことにより、高めあっているのではないかということを感じた。しかし、その一方で、大学内の人種やジェンダーの格差、偏見等が存在するという問題点を発見したため、2大学における格差是正の必要性を実感した。

言語においては、RP という標準英語が人口の2パーセントしか使用されていないということと、スコットランドにおいて使用されている、SSE を1つの言語であると認識されていないということから英語の多様性について実感した。

2. Summer Course “English Language and Culture”

at Anglia Ruskin University



1. 授業形式

担当教員（曜日毎に先生が変わる）

ナズ：授業ではゲームを多く取り入れていたため、生徒の楽しませ方が上手い先生であった。

我々のスコットランド訪問時に丁度エディンバラフェスティバルで劇をやっていたため鑑賞に行った。右上の写真がそのときの写真である。

ミッシェル：授業に生徒のやりたいことを取り入れてくれるなど生徒と距離の近い先生であった。私たちに旦那さんを紹介するなど、自分をオープンにして接してくれるためとても親しみやすい先生であった。

ショーン：留学中の授業以外を担当してくれるスタッフ。学校の説明や午後のアクティビティーなど学校生活全般の面倒を見てくれる。

通常授業

授業時間：9:00～12:00 で先生の指示により休憩がある。午後はアクティビティーがある。アクティビティーとは、イギリス文化を肌で感じるができる体験型の授業である。

授業人数：コース参加者 8 人＋他コースの中国人 6 人＝14 名

他コースの 6 人は先にプログラムを終了したため後半は 8 人で授業が行われた。

2. 授業内容

Topic 例

• Food

イギリスの食文化についてのレクチャー。テレビ番組出演により人気をばくしたジェイミー・オリバーによるナゲットの作り方の授業映像などを見た。ジェイミー・オリバーは学校給食改善活動などを行い、ジャンクフード主流の食文化を改善するため、ヘルシーなレシピを考案する「食育」を行っている。

• Heritage

高さ 7 m 程の石柱が直立し、その石柱で円を型取っている遺跡、Stonehenge の成り立ちについてゲームなどを用いて学んだ。紀元前 2500 年から紀元前 2000 年に立てられたと言われており、天文学の知識や当時としては高度な石柱を立てる技術が用いられている。

• Literature

『不思議の国のアリス』などを取り上げ、Nonsense な詩などを学んだ。

• Dialect

コックニーやスカウス、ジョーディーなどイングランド内の方言を話す人の映像を見るなどしてイギリスの方言を学んだ。

• Sports

ケンブリッジ大学においてカレッジ対抗で行われているボートスポーツ May Bumps など日本人が知らないようなイギリスのスポーツを学んだ。

• Immigrants

ケンブリッジに住む移民取材した雑誌を用いてイギリスの移民について学んだ。その雑誌の編集者はその授業の先生の旦那さんであった。

• Cultural exchange

留学にきていたパナマ人と交流をする授業があった。

• Presentation

パワーポイントを使い、2 人 1 組に分かれて日本の文化について 10 分程度のプレゼンを先生に向けて発表した。

3. アクティビティ（課外授業）

・ Ely 観光

ケンブリッジ駅から電車にのり数駅移動したとろにイリーという名の歩いて回れる程の小さな街があり、そこを観光した。大聖堂など歴史的な建造物が多く残っている街であった。大聖堂は 1083 年に建設が開始され、1351 年に完成したと言われている。



・ Botanical Garden

大学の近くにあるケンブリッジ大学のボタニカルガーデンに行った。時期の問題もあり咲いている花などはあまり見ることができなかった。明らかに人工的な部分もあったが、イギリス式庭園のように自然に植物が育っているように見える部分も多々あった。



・ London

土曜日にバスに乗りロンドンへいった。ビッグ・ベンやロンドンアイの近くに降ろされ、再びそこに集合という形がとられた。私たちはバッキンガム宮殿やトラファルガー広場、大英博物館を訪れた。



・ Punting

ケンブリッジを流れるケム川を手動のボートで移動するアクティビティー。ボートに乗っているからこそ川側からトリニティーカレッジやキングスカレッジを見ることができた。川の流が緩やかで川が移動手段の1つとして栄えていたイギリスならではのアクティビティーである。



・ Pub

大学職員の引率により近くのパブを訪れた。数種類のビールを飲み比べたり、シードルというイギリスでは主流のお酒を飲んだりした。観光地ではないため地元の人の生活を垣間見ることができた。



4. まとめ

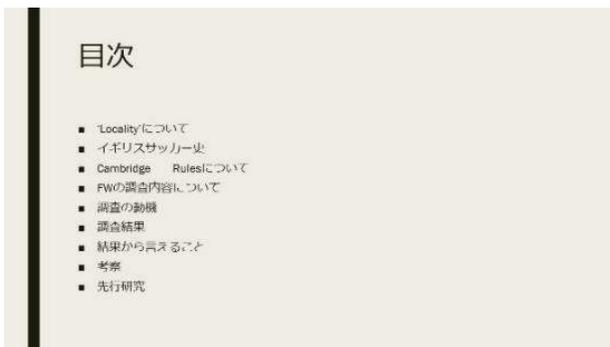
講義やアクティビティーを通してイギリス文化を肌で体験できるコースであった。英語を使ったコミュニケーションだけではなく、文化的な内容が授業に組み込まれていたことが日本で学ぶイギリスよりもリアルな文化を学ぶことができた。

担当してくれた先生2人もとても優しくフレンドリーに接してくれた。日本人との違いかもしれないが人との距離を詰めるのが大変うまいと感じた。また、コースが終了するときは「あなたたちは本当の私の生徒」と言ってくれてとても感動した。それくらい先生と親しくなれたのがとても嬉しかった。大学自体が夏休みということもあり私たちが接した学生は中国人やパナマ人が多かったが、イギリス人以外と交流できたということも大変貴重な経験であった。留学に行くまで中国人と接する機会はあまりなく、日本で見かける中国人はマナーが悪いという印象が強かったが、アングリア・ラスキン大学で接した中国人は気づかいができるとてもいい人達であった。固定観念で人を決めつけてはいけないと改めて感じさせられた。同じコースに参加していた中国人とは毎日一緒に食事を取り、食後にトランプなどをして遊ぶほど仲良くなった。パナマ人とは普段触れ合う機会もなくどのような人達なのか、どのような国なのか全く知らなかった。しかし、1人のパナマ人とは数回一緒に公園でサッカーをするなどとても親しくなることができた。国境を越えたスポーツの力を肌で感じる良い経験ができた。

コースの特色として語学研修よりも文化学習の方が濃かったため短い間に様々な異文化体験をすることができた。この経験は今後の人との関わりに大きなプラスをもたらさずである。

3. Field Work Presentations

1. 150019 阿部幹正



・この研究における Locality
Locality には様々な意味があるが、ここでは「地方」という意味である

イギリスの19世紀のサッカー史

- 1848年にケンブリッジ大学で初めてルールが策定され、ルール統一への動きが加速した。
- 1863年にFA (Football Association) という世界初のサッカー協会ができた。
- 1872年には初の国際試合スコットランド対イングランドが開催される。
- 1888年には世界初の国内リーグ戦が始まった。

・ 19 世紀イギリスのサッカー史

1848 年初めてルールが制定されたことにより、ルール統一の動きが加速

1863 年には FA というサッカー協会が誕生した

Parkers-pieceにある看板

この看板はケンブリッジにて最初、統一的なサッカーのルールが作られたことを示している



・ ケンブリッジに存在する石碑
左にある石碑はケンブリッジで最初にサッカーの統一ルールが作られたことを示している

FWの調査内容

- ① 『あなたの好きなサッカーチームを教えてください』
- ② 『そして、なぜそのチームが好きなのですか？』

ケンブリッジ・ロンドンにて街頭アンケートを実施。シールを貼ってもらう形式でアンケートを行った。

・ 調査内容

アンケートを用いて調査を行った

質問内容は

▶ 「あなたの好きなサッカーチームは？」

アンケートの詳細

- 対象人数：38人
- 対象：イギリス人と思われる
- 階級：不明
- 日時：2017年8月10日～14日
- 場所：ケンブリッジとロンドンの街頭

・ アンケートの詳細

▶ 対象人数 38人

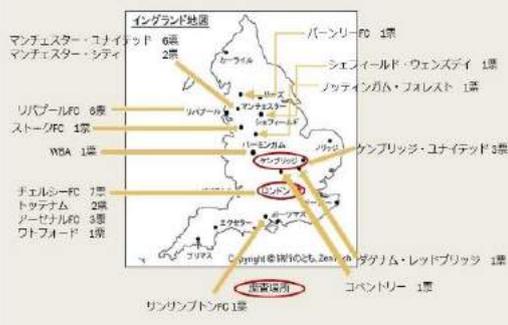
▶ 場所:ケンブリッジとロンドン

調査の動機

- Localityがイギリス人の各々の好きなサッカーチームにどのような影響を及ぼすか興味を持ったから。
- このアンケートを取ることによってイギリス人の地元への関心がどれくらいなのかを知ることができると思ったから。
- 調査の場所のケンブリッジには有名なクラブがないが、果たしてどのような結果になるか興味を持ったから。

・調査の動機

- ▶ 地域性がイギリス人の好きなどのような影響を及ぼすのかが気になったため
- ▶ イギリス人の地元愛がどれくらいなのか分かるのではないかと考えたため
- ▶ ケンブリッジには有名なサッカーチームが存在しないが、どんな結果になるか興味を持ったため



・結果①

「あなたの好きなサッカーチームは？」

- 1位 チェルシー (ロンドン)
 - 2位 マンチェスターユナイテッド・リヴァプール
 - 3位 アーセナル (ロンドン)・ケンブリッジユナイテッド
 - 4位 トッテナム・ホットスパー (ロンドン)・マンチェスターシティ
 - 5位 その他
- となった

下の地図は、各チームの所在地を表したものである

①の結果

- Manchester United 6票
 - Manchester City 2票
 - Chelsea (London) 7票
 - Arsenal (London) 3票
 - その他1票ずつ
 - Liverpool 6票
 - Tottenham Hotspur(London) 2票
 - Cambridge United 3票
- Burnley, Watford, Southampton, Stoke, WBA, Coventry, Sheffield Wednesday, Dagenham and Redbridge, Nottingham Forest

②の結果

- 強さ 1票
- ホームタウン 15票
- サッカースタイル 4票
- 選手 6票
- 監督 7票
- スタジアム 1票
- サポーター 3票
- 友だち 1票

・結果②

「なぜそのチームが好きなのか？」

- 1位 地元だから 15票
- 2位 監督のファン 7票
- 3位 選手のファン 6票
- 4位 サッカースタイルに惚れた 4票
- 5位 サポーター 3票
- 6位 スタジアム・友人・強さ 共に1票

①の結果より

- 有名なクラブはやはり人気
→どこでもある程度の数のファンはいるのではないか
- Cambridge UnitedのCambridgeでの人気
→あまり強くないのに応援されている
- 1票のチームの多さ
→そんなに有名ではない自分の好きなチームを堂々と言える

・結果①から

- ▶有名クラブはどこに行っても人気なことだから、どこにでもある程度ファンは存在するのでは？
- ▶ケンブリッジユナイテッドは規模がそこまで大きくないのに地元人気がある
- ▶1票のチームが多いことから、自分の好きなチームに誇りを持っている

②の結果より

- チームが強いか弱いかというのは重要である
→当然有名なクラブは強いから人気がある
そのために優秀な選手や監督を集める
- ホームタウンにあるクラブであることがそのクラブを応援する理由であるという人が多い
→家族の中でも好きなクラブが違ったりしていた

・結果②から

- ▶チームが強いか弱いかは重要視されているため有名なクラブは人気があって当然。強くするために人気クラブは選手や監督を集める
- ▶地元のクラブという理由で応援している人も多い。家族の中で好きなクラブが違っていることもあった

考察

- イギリスにおいてホームタウンへの意識の一つとして地元のサッカーチームを応援するという行動によって現れる→Localityの強さ
- 日本のサッカーリーグにはそのような意識はイギリスに比べまだまだ浸透していない
→プロ野球は球団数も少なく、球団は大都市に集中
ホームタウンよりは選手だったり、強さに影響されてファンになりがち

・考察

- ▶地元意識の一種として、地元のサッカーチームを応援するというものがあることから地域性の強さがそこから分かるのではないか
- ▶日本のサッカーリーグではこのような地域性の強さが垣間見えない。選手や強さに影響されてファンになる人が日本では比較的多い

先行研究から

- 『イギリスのサッカー研究の系譜とカルチュラル・スタディーズ』小笠原博毅（2016）を参考にした。
- 「地域に密着した男性労働者階級の文化として再発見されたサッカー」という表現から20世紀後半の社会的なサッカーへのアプローチの方法は3点。
 - ➡ 階級、ジェンダー、クラブと地域の関係への着眼

- ・ 先行研究から
社会的なサッカーの見方は 3
つ存在する
- ▶ 階級
- ▶ ジェンダー
- ▶ クラブと地域の関係
である

クラブと地域の関係への着眼

- 『ファンたち自身が育ったコミュニティ出身でサッカーがうまい子どもが、やがて特定のクラブのユース・ランクに上がり、最後はレギュラーになり、いずれ代表に召集されてワールドカップで戦うという『物語』』



1970年のイギリス大失業時代、「フーリガニズム」が「イギリス病」の徴候として労働者階級を協商する小道具に。
サッチャーの改革で人権の問題の面が顕在化してくる。

- ・ クラブと地域の関係への着眼
ファンたちが育ったコミュニティのサッカーの上手い人が将来、ワールドカップの舞台に立つという物語



- 1970年代の大失業時代で、「試合中の観客の暴力行為」が労働者階級に結びつけられていた
- サッチャーの改革で人権の問題の面が判明してくる

大衆文化としてのサッカー

- 転機：1995年のボスマン裁定・・・EU域内の選手間移動が激しくなる。
クラブ経営が市場ビジネス論理の方向へ。



これまでの労働者階級の男性やそれに付随する家族や若者に特有の文化だったという図式が崩れていく。

- ・ 大衆文化としてのサッカー
 - ▶ 1995年のボスマン裁定によって、選手の移動が活発になったことにより、クラブ経営にビジネス的要素が求められるようになる
- 
- ▶ 労働者階級への偏見が崩壊していく

今後について

- まだこの論文のすべてを分析できていないのでまずそれを行う。
- さまざまな文献をあさり、社会学的な面から考えていきたい。

・今後について

- ▶ この先行研究の解明が先決
- ▶ その後、様々な文献からサッカーの社会学的側面を明らかにしていく

参考文献

- 小笠原博毅 『イギリスのサッカー研究の系譜とカルチュラル・スタディーズ』 オンライン、「スポーツ社会学研究」、インターネット、https://www.istage.ist.go.jp/article/jisss/24/1/24_35/pdf-char/ia
(2018/1/12閲覧)

2.150050 石井玲央菜



• New Criticism とは何か
19世紀から20世紀前半にかけて用いられた文学批評の方法である
この方法は“Close Reading”を強調するものであるが、“Close Reading”とは文学作品の文章を注意深く考察しながら読んでいく方法の事を指す

基本概念

- 意図のエラー(intentional fallacy)
著者の意図≠テキストの意味
- 形式要素(formal element)に集中
- 有機的統一性(organic unity)=複雑性と秩序

基本的な概念としては 3 つ存在する

一つ目は意図のエラーである。著者の意図とテキストの意味が必ずしも合致しないという側面が存在する

二つ目は形式要素に焦点が当てられるということである

三つ目は有機的統一、つまり複雑性と秩序を内包した考えである

複雑性を構成する要素

- 逆説(paradox) : a seemingly self-contradictory that must be resolved on a higher metaphysical level
- アイロニー(irony) : That words express a meaning that is often the direct opposite of the intended meaning
- 曖昧性(ambiguity) : multiple meanings
- 緊張(tension) : balanced opposites or conflicts operating with in a text

複雑性を構成する要素は四つ存在する

逆説・アイロニー(皮肉)・曖昧性・緊張である

作品への応用1

- 使用した作品
- Kate Chopin: "The story of an Hour"
- 元々心臓に持病を抱えていたMrs. Mallardが夫の悲報を聞き、人で部屋に閉じこもったのち再び部屋を出るとそこにはなくなったはずの夫がおり、妻は持病により無くなる。

ここで“New Criticism”を用いて、“The story of an Hour”という文学作品を検証していく

下にある文章は研究対象の文学作品の一文である

作品への応用2

- 曖昧性:sobの捉え方
- 逆説:一人で部屋に閉じ困っているのに自由を感じる
心臓病という存在
- 緊張:みんなではあはれられない感情(仮面を使う)一人になって表れる(自由)→死

曖昧性という観点ではすすり泣く事に対する解釈を検証することになる

逆説という観点では孤独であるのに自由を感じることを考えることになる

緊張という観点ではみんなの前では感情を隠す

↓

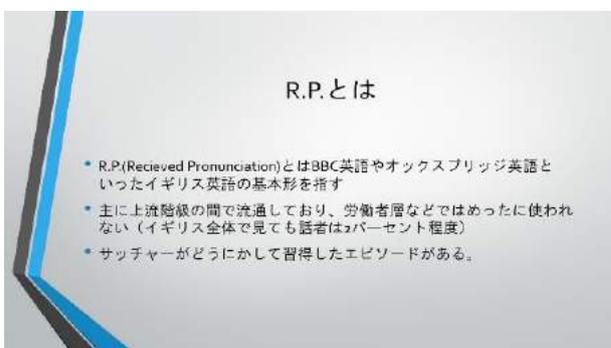
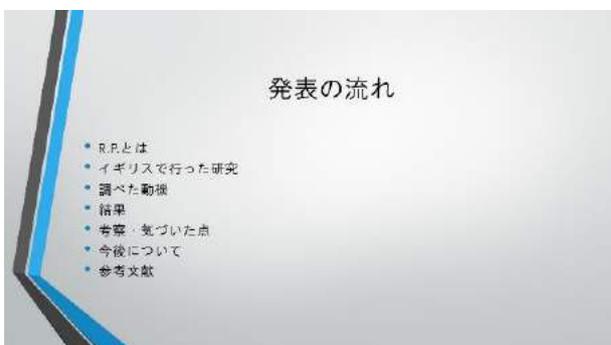
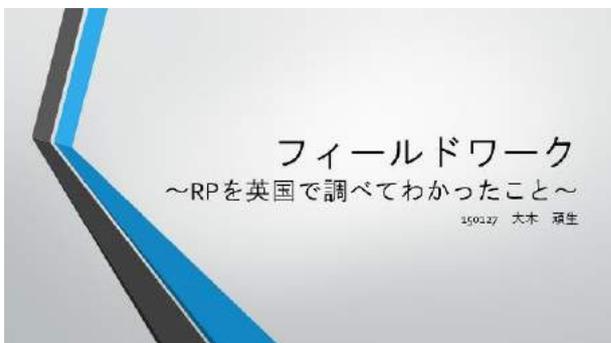
孤独であるときに曝け出す

↓

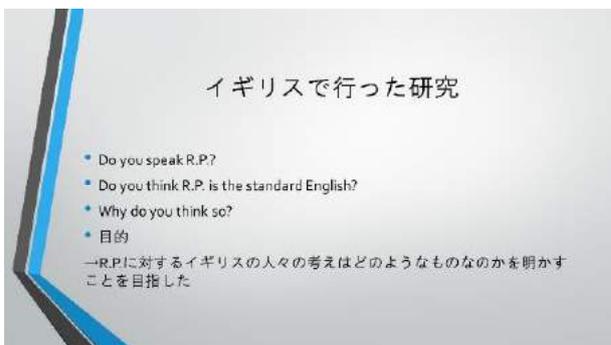
死

という流れの理由を考える

3. 150127 大木 碩生



• RP とは何か？
いわゆる BBC 英語、クイーンズイングリッシュというフォーマルな場で使われる英語である
主な話者は上流階級である



イギリスでは左記の三つの質問を行った
イギリス人がRPをどう思っているのかを検証していく

調べた動機

- "It has a negligible presence in Scotland and Northern Ireland and is arguably losing its prestige status in Wales" (ItはR.P.のことを指す)
- 上のようにスコットランドやウェールズ、北アイルランドではR.P.は重要な英語であるという認識が薄まりつつある。
- ↓
- これはなぜなのか。上で言及されていないイングランドではこのような状況に陥っているのだろうか。

• 調べた動機
 イングランドを除く三ヶ国ではRPが重要であるという認識が薄まりつつあるという記事を見つけたため

仮定

- R.P.が話されない理由について
- イギリスに存在する様々なRegional Dialectが関わっているのではないだろうか？
- Regional Dialectが流通していることから、わざわざ苦勞してまでR.P.を習得する必要がなくなったのではないか

• 仮定
 RPが話されないのは
 • Regional Dialect
 が原因ではないだろうか

結果①

- Do you speak R.P.?
- Yes 7人
- No 12人
- Partly 2人
- Do you think R.P. is the standard English?
- Yes 5人
- No 16人

アンケート結果
 ▶あなたはRPを話すか？
 YES:7人
 NO:12人
 PARTLY:2人
 ▶RPは英語の標準形ですか？
 YES:5人
 NO:16人

結果②

- Why do you think so?
- Yes
 世界中に通用する発音だから
 イギリス英語を統一した形だから
- No
 Regional Dialectが広まっているから
 イギリスではほとんど話されていない

Yesと答えた人は「世界に通用する」、「イギリス英語の統一形」という意見だった
 それに対し、Noと答えた人の意見は「Regional Dialectが主流」、「イギリスではほとんど話されていない」という意見が多かった

結果③

- No
イギリスには多くの移民が入ってきているので基準となる英語があやふやになってきている。
R.P.は英語の特定の形に過ぎない
書き英語は誰でも同じだが、話すとなると訛りが出るのが普通
そもそもスタンダードな英語は存在しない

考察・気づいた点①

- 貴族言葉は世界に通用する英語といった意見が多数派を占めていた。
- イングランドでも同様な質問をしたところ反対派が賛成派を上回った。
- 反対派の方が意見として挙げたのが
→イギリスに存在する方言の影響か
- 移民の増加
といっただけであった。
- R.P.を話せる人でもR.P.を標準語として考える人は少なかった。
- ↓
- 広範囲の間でも標準語としてはあまり考えられていない

考察・気付いた点②

- 以上のことから考えると、そもそもR.P.は英語の基本形ではあるが、一般的に広まるような英語ではない。
- ↓
- R.P.への認識が変わりつつあるのは移民が増加していることや、政治情勢の変化なども原因になっているのではないだろうか。
- 例えば、スコットランドでは現在イギリスから独立するかどうか問題になっている。

今後について

- R.P.を話さない人が増えていることに対し、原因として移民の増加やRegional Dialectの広まりを挙げたが、今後これらがどのようにR.P.に影響を与えているのかということを考えていきたい。
- 移民の増加により、他地域の英語が増加したことでRegional Dialectが増加したことにより、R.P.への認識が変わりつつあるのか、それともそもそも英語を話せない人が増えたことにより英語自体の影響力が失われつつあるのか、そういうことを調べてみるともっと面白いと思った

・考察

イングランドでも同じ質問をしたが、NoがYesを上回った。

RPを話す人でもそれを標準語と考える人は少なかった



そもそもRPは一般的に広まる英語ではない

RPへの認識がそれでも変わりつつあるのは様々な要因があるのではないか

・今後について

RPの認識が変わりつつあるのは何が原因なのかを今後考えていきたい

余談

- ケンブリッジでは大学の先生44人に聞いてR.P.を話せる人が5人いた
 - ロンドン・オックスフォードでは一様の方々10人に聞いて話せる人が2人だった
- ↓
- 先生という立場上、誰にでもわかる英語を使わなくてはならないのでR.P.を用いる人が多い

・余談

大学の先生にはRPを話す人が多かった



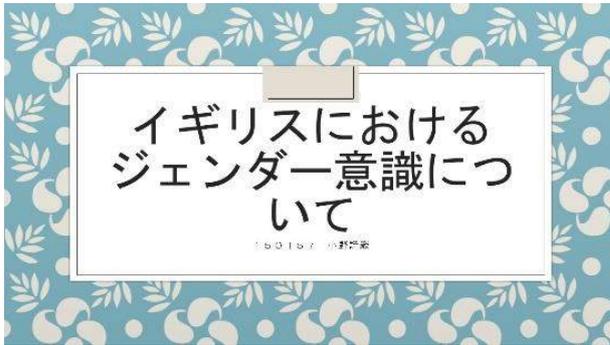
先生なので誰にでも理解される英語を話さなくてはならないから

参考文献

Received Pronunciation

<http://www.b1.uk/learning/taught/sounds/find-out-more/received-pronunciation/> 2017年1月11日アクセス

4. 150167 小野詩織



目次

- ・ 研究テーマと動機
- ・ 先行研究
- ・ 調査方法
- ・ FWの結果
- ・ 考察

イギリスにおけるジェンダー意識

動機

イギリスは、女性の首相が存在しており、女性議員の数や女性管理職の割合が高く、女性の社会進出が進んでいる国であると考えられる。

しかし、19世紀やそれ以前のイギリス小説を見ると、女性は劣悪な労働環境で働かされていたり、夫の財産目当てで結婚したり、女性の地位の低さや経済的に自立していない姿が描かれている。

どのようにして女性が地位を築き上げてきたか、また現状はどうなっているのか気になったため。

・ 調べた動機

19世紀やそれ以前のイギリスでは女性の地位が低く、自立できていなかった

上のような状況からどのようにして現代の女性の社会的地位にたどり着いたのか気になったから

先行研究

- ① 歴史的背景
- ② 政策の根幹となっている法律
- ③ 現状

①歴史的背景

18世紀末の産業革命より、性的役割分担により家庭にいた女性が工場に出て働くようになった。
しかし女性労働者は主に繊維や衣料産業での単純労働で、賃金も低く労働環境も悪かった。一方でミドルクラスの女性は教養と余暇を享受 → 貴族教育などの慈善活動に乗り出すようになる
1890年 女性労働組合連盟
女性の人的、社会的な無権利状態を女性自身が自覚

英国におけるフェミニズム運動は、ミドルクラスの女性たちが先導したことが特徴

・歴史的背景（初期フェミニズム運動）

産業革命によって女性の社会進出が促されるが、労働環境は極めて悪いものだった



ミドルクラスの女性たちが女性労働者を救おうと社会運動を行うようになる

現状

・2016年のジェンダーギャップ指数
イギリス144か国中20位（先進国7か国の中では3位）日本（世界経済フォーラムより） **111位**
・2013年の25～54歳の女性の平均就業率74.3% 日本 **69.2%**（OECDより）

・現状

ジェンダーギャップ（性差）指数ではイギリスは上位に位置し、日本と比べるとその差は歴然である

平均就業率でもイギリスは日本をリードしており、日本と比べて女性の地位が安定していると言える

②政策の根幹となっている法律

・「性差別禁止法」・・・教育、サービスの供給、広告などあらゆる場面に於ける性差別を禁止
・「賃金平等法」・・・男女間の待遇や賃金を統一
・「雇用関係法」・・・出産休暇、育児休暇、家族休暇など

・政策の支えとなる法律

主に三つ存在し、

- ・「性差別禁止法」
- ・「賃金平等法」
- ・「雇用関係法」

が政策を支えている

調査方法

・アンケート調査
階級や世代によって、ジェンダーの感じ方の違いがあるのか調べる

・芸術鑑賞
都市の博物館や美術館を回り、ジェンダーについての歴史的な背景を理解する

・調査方法

調査方法はアンケート調査と芸術鑑賞の二つを選択

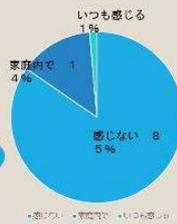
詳細は左記である

調査結果

アンケート調査

調査人数 26人 (内女性18人 男性8人)

①あなたは日常生活の中で、いつジェンダーギャップを感じますか？



アンケート結果

②あなたは、ジェンダーと社会階級は互いに関係していると思いますか？



調査方法

・アンケート調査

階級や世代によって、ジェンダーの感じ方の違いがあるのか調べる

・芸術鑑賞

都市の博物館や美術館を回り、ジェンダーについての歴史的な背景を理解する

・アンケート調査の結果

「日常生活の中で、ジェンダーギャップを感じるか」への回答について No と答えた人が圧倒的だった

それに対し、「ジェンダーと社会階級は関連し合うか」という質問については Yes と答えた人が No と答えた人より多かった

・芸術鑑賞

調査場所:V&A 博物館

様々なジャンルの芸術作品を揃えている国立美術館



・結果

1800年代後半～1900年代
女性の社会進出が始まり、スーツやバッグの生産が盛んになった。

1920～1930年代
女性の新たな自由の表現としてスポーツファッションなどが取り入れられるようになった

まとめ

- ・社会に出たタイミングでジェンダーギャップを感じている人はほとんどいなかった。しかし、働いている女性の数は、家事を分担できず毎日自分の時間が思うようにとれないということを言っていた。
- ・BBCでは英国のジェンダー問題についてよく取り上げているが、結局は実力主義の国であるため、管理職にも女性は多くいるという印象を持っていた。
- ・ジェンダーと社会階級はかわりがあると考えている人が多かった。
- ・ファッションは、ジェンダーに限らず多くの社会の流れを反映していた。

・まとめ

ジェンダーギャップを感じる人は少なかったものの、仕事と家事のバランスが取れないという人もいた

イギリスは実力主義のため、管理職の女性も多くいるという印象があった

ジェンダーと社会階級の相関性を認める人が多かった

ファッションが表していることはジェンダーに限らない

考察

- ・出産や育児などの関係で、男女の就業率に差があるものの、ジェンダーの差に不満を感じている人はほとんどいなかった。制度上は日本と大差なかったため、家事や育児など、ライフスタイルにも関係があるのではないかと。
- ・ジェンダーと階級の関係について、階級が低いから制度が保障されていないというわけではなく、階級が高くなるにつれ広い教養を身につけるので、社会の在り方に合わせた柔軟な考え方を持っている人が多い→家庭内での家事分担、育児分担、...
- ・男女間だけでなく、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー）に対しても先進的な政策を行っている→ジェンダーに対してステレオタイプを植え付けない教育を行っているのではないかと

・考察

イギリスではジェンダーの差に不満を感じている人が少なかったことに加え、制度も日本と似かよっているため、ライフスタイルが影響を与えているのではないかと

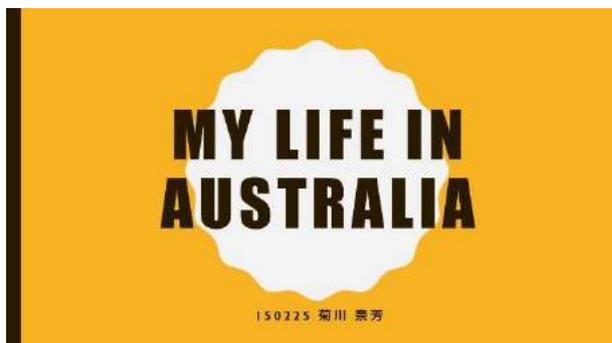
階級が高くなるにつれて、柔軟なライフスタイルを持つ人が多くなる

LGBT に対する政策も行っていることから性別に対し、ステレオタイプを植え付けない教育を行っているのではないかと

参考文献

- ・ 鎌倉恵美子（2015）『変革の礎としてのジェンダー』 ミネルヴァ書房 p25～40
- ・ 「イギリスにおけるジェンダーギャップ政策」財団法人自治性国際協会
http://www.cjair.or.jp/forum/c_report/pdf/224.pdf (2018年1月11日最終アクセス)
- ・ 「フェミニズムの第2の波と「ジェンダー」の発見」比較ジェンダー研究会 三成美保著
http://ch-gender.jp/wp/?page_id=171 (2018年1月11日最終アクセス)
- ・ 「ジェンダー開発」 独立行政法人 国際協力機構
<https://www.jica.go.jp/oc/f/iss/issues/gender/> (2016年1月11日最終アクセス)

5. 150225 菊川奈芳



MELBOURNE

I've been in Melbourne, Australia since Nov 2017
This is the second biggest city in Australia and
It's known as the world's most
livable city.



- ・メルボルンってどんな町？
- ▶オーストラリアで二番目に大きい都市
- ▶世界で最も住みやすい都市として知られている

WHAT I BEEN DOING

Language school –Nov 2017 to Jan 2018–
I went to a language school in central business district of Melbourne for 8weeks.
I did not only attend classes, but also joined some activities held at school.

-Purpose
To improve my English skill

-Result
- I got basic English skills and made lots of friends from all over the world
- I gained cultural experiences from meeting different people from around the world



- ・留学でのアクティビティ
- ▶言語学校
- 8週間、メルボルンの言語学校に通う
- 目的-英語の運用能力の向上
- 結果①-英語の基礎を築けただけでなく、多くの友達に恵まれた
- 結果②-様々な文化圏の人々に出会うこともできた

Part time job –Nov 2017 to Jan 2018–
I worked at Japanese restaurant "得 Sumiyaki" for about 2 months. It was one of the few opportunities for me to meet with native English speakers. Despite being a Japanese restaurant, the staff were from different countries. I gained much more than money.

-Purpose
To make good use of my time (I actually had lots of spare time before I got job because I only had school as an activity)

-Result
- I got practical English skills through the conversations with customers and co-workers
- I got precious friends through working together



- ▶アルバイト
- 様々な国から来た人々やネイティブの方と話す機会が得られた。
- 目的-余剰時間の有効活用
- 結果①-お客さんや仲間との会話を通して、英語を会話で扱えるようになった。
- 結果②-素晴らしい仲間に出会った

Homestay – Nov 2017 to currently –

I have been hosted by 3 lovely families in Australia. During my homestay, I have been able to expand my English by having conversations with my host family members. I also have been able to reflect on the differences and similarities between Japanese and Australian cultures.

The wonderful experiences I had with host families

- Camping
- Birthday celebration
- Australian style home parties
- ...etc



▶ホームステイ
ホームステイではホストファミリーとの会話を通して、英語を学ぶことが出来た。日本とオーストラリアの相違点や類似点を理解できた
キャンプや誕生日パーティーなど、非常に忘れられない経験が出来た

Work as a Japanese teaching assistant
– Feb 2018 to currently –

I've been working as a language teaching assistant at local Catholic secondary school.

-Purpose

- To gain insight into Japanese language education (I've been interested in Japanese language education since I was in high school)
- To brush up my English by spending time with Australian speaking people i.e. Teachers, students and other

-My main work as an assistant

- Supporting classes for Year7-Year12
- Private conversation classes for Year12
- Correction of quizzes and essays



・まとめ
▶ネイティブの方と話すことが出来るようになった
▶日本語の教育方法が理解できた
▶日本の文化や言語の楽しさに気付くことが出来た

-Result

- I've been able to work with native English speakers
- I now understand how Japanese is taught in the Victorian Education System
- By teaching Japanese, I have noticed how interesting the Japanese culture and language is

THROUGHOUT LIVING IN AUSTRALIA

My English has clearly improved.

I have become tolerant of difference in the cross-cultural exchange.

Through meeting new people, I encountered a different set of values and my point of view is more worldly.

I realized the splendor of Japanese culture and language.

・留学を通して
▶英語を上手く使えるようになった
▶異文化に抵抗を感じなくなった
▶色々な人に会って、様々な価値観を共有しあった
▶日本文化や日本語の素晴らしさを再認識できた

WHAT I WILL DO IN REST OF MY STAY

Work in farm to get 2nd year Visa

-I've been attracted to Australian culture and life, and I want to extend my stay in this country

Going to travel

-I want to meet more people and get a lot of experience with using English

Brush up my English

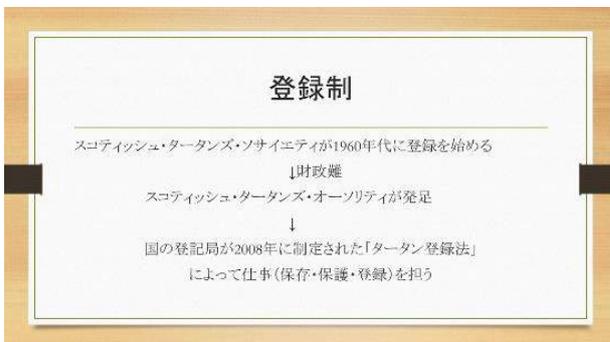
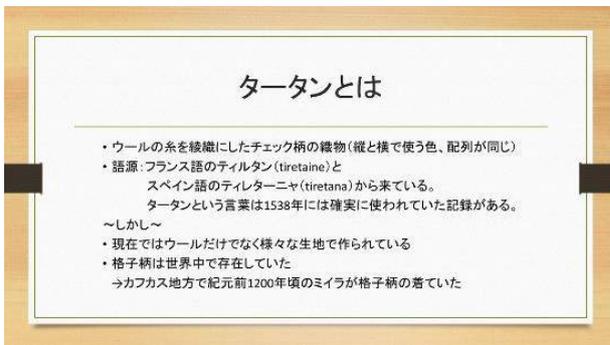
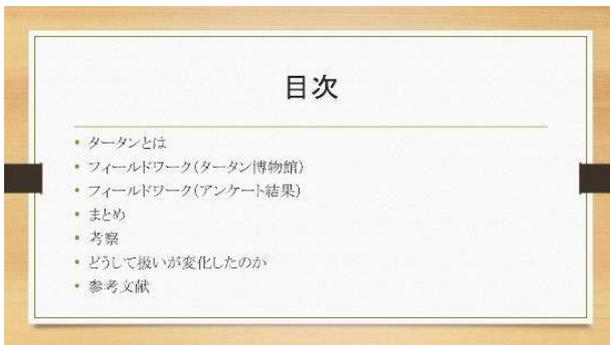
-My goal is to be like a native English speaker

I want to use English without even thinking

・今後の予定

- ▶農場で働いて、二年のビザを得る-オーストラリアの文化に魅かれたので、留学の期限を延ばしたい
- ▶旅行に行く-もっと多くの人と会って、英語で話がしたい
- ▶自分の英語をさらに磨き上げる-目標はネイティブのように流暢に英語を使えるようになること。考えなくとも英語が出てくるようにしたい

6. 150321 三仙淳誠



・タータンとは
ウールの糸を綾織にした織物。
↓
現代のタータンの材料はウールだけではない
フランス語やスペイン語に語源が存在し、16世紀の頃から使われていた形跡がある
格子柄は世界中で存在していた

・登録制
現在は国の登記局が柄の保護、登録を行っており登録された柄だけがタータンと名乗ることができる
もともとこの登録制は1960年代に始まり、現在は「タータン登録法」に基づいて、登記局が登録を行う

ロイヤルスチュアート



http://docomi.jp/wp-content/uploads/2015/10/img_001-01.jpg

- ロイヤルスチュアート
スコットランド王室を表す柄
である

ロブ・ロイ



<http://img.ponparemall.net/imgmgr/29/00106829/product/textimg/197.jpg>

- ロブ・ロイ
スコットランドの英雄ロブ・ロ
イ・マクガレーを表すタータンで
ある

アンシェント・マクミラノ



http://www.stm-lens.com/boatthings/2013/september/2013_0020.html

- アンシェント・マクミラノ
伊勢丹が使用するタータン

マックアンドレアス



<http://jp.fashionerworks.com/news/ヴィヴィアン・ウエストウッド・ジョンストンズ・マックアンドレアス特約コレクション発売,30285.html#Wiemalput.mj>

- マックアンドレアス
ヴィヴィアン・ウエストウッド
が登録したタータン

タータン・ウィービングミル&エキシビジョン

紀元前2200年:世界最古のタータンが中国北西部で織られる。
 西暦250年:スコットランドで初めてのタータンが織られる。
 1500年:フランス語のtweedからきたタータンという言葉が使われ始めた。
 1598年:本格的にタータンを作る仕事が始まる。
 1746年:ジャコバイトの戦い後タータンは使用禁止される。
 1822年:ジョージ6世がロイヤルタータンを切り、独自のタータンを身に着ける。
 1853年:アルバート王が妻(クイーンヴィクトリア)のためにタータンをデザイン。
 キッチンに床をタータンにすることが人気になる。
 1975年:エディンバラの港町で行われたパレードによりタータンファンが急増する。
 2009年:初めてタータン専用の羊が作られる。
 2015年:10以上のタータンが毎月登録され、タータンを作ることにより結婚を祝っている。

・タータン・ウィービングミル&エキシビジョン

エディンバラにあるタータン博物館に記載されていたタータンの歴史

タータンはスコットランドにとっても根付いているものでイギリスの歴史においてイングランドとスコットランドの対立により使用が禁止されることもあった

現在では結婚の記念などにタータンを作り登録するなど、登録数が増えている

アンケート結果(63人)

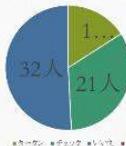
- ①「タータンのイメージ、印象は？」
- ・スコットランド伝統のもの
 - ・お土産としても人気
 - ・マフラー、スカーフなどに多い
 - ・アレクサンダーマックイーン、ヴィヴィアンウエストウッドが使い方を考えた
 - ・キルトでできている
 - ・冬を考えさせる

・アンケート結果

日本人との意識の違いを考えるためにこの質問をした。イングランドの様々な土地でアンケートをしたところスコットランド伝統のものなど、日常的な柄ではないというイメージの人が多かった

アンケート結果(63人)

②「タータンもしくはチェックの服を持っているか？」



・アンケート結果②

・タータンもしくはチェックの服を持っているか

タータン:1人

チェック:21人

どちらも持っていない:32人

理由

タータン

- お土産でもらったから(ロンドン 女性)
- ブランケットやマフラーなどの小物ならもっている
- スコットランドに行った記念に買った

チェック

- 着るのが簡単だから
- トрендとして取り入れやすいから(古着屋の店員 女性)
- 持っていて損はない(オックスフォード 男性)

・理由

持っている人でもお土産などの記念品として所持している人が多かった

また、若者はタータンやチェックを柄としてとらえているため気軽に所持しているという印象を受けた

理由

持っていない

- チェックは若者のイメージがあり手が出しづらい(大学の年配の女性 先生)
- スコットランドのイメージが強いから(ロンドン 女性)
- 買う機会がなかったから
- 気に入ることがなかったから

・理由②

持っていない理由はやはり馴染みがないという回答が多かった

まとめ

タータンの物→普段着というよりはかお土産のような扱い

チェック→若い世代は持っている人が多い
年配にはまだ服の柄として浸透していない

・まとめ

タータンはお土産として扱われることが多く、若い世代には広まっているが、年配の方にはまだ浸透していない

課題

- アンケートのとき年齢などを聞かなかったためもう少し年代なども細かく調査した方が良いデータがとれたはずである。
- 出身なども細かく分けて調査できたらよかった。

・課題

アンケートをしたきっかけがタータンについて何かを理解する機会になればいいという大雑把なものであったため、細かい人の条件を聞く項目を忘れてしまった。アンケートでは目的意識やある程度の結果の予想なども大切である

考察

年配の方→タータンがスコットランド伝統のものという意識があるため
普段着として着ることがない。

若者→タータンに関する固定観念がないためただの柄として見ている
日本でのタータンの扱いに近い

⇒年代によりタータンに関する考え、扱いが変化している

・考察

年配の方はタータンが伝統的なものであるという固定観念があるためあまり普段のものとして持ち合わせていなかった

理由としてディストリクトタータンやクランタータンといった使用法をされていたからではないか。若者はタータンやチェックをただの柄として見ているため日本人の感覚に近いのではないか

どうして年代により考え、扱いが変化したのか？

考えられる理由：商業的用途が増えたから

伝統的な用途から商業的用途へタータンの扱いが変化
伝統的のクランタータンやディストリクトタータンのように
簡単に部外者が着ることができないものではない
商業的の商品になることにより、お金を払えば利用可能になる

登録制商品でもタータンが作れ、用いることができる

・タータンの扱いの変化

商業的にタータンが用いられるようになったためお金を出せば使用できる柄になったことが年代によるイメージの違いを生み出したのではないだろうか。また、タータンの商業化に拍車をかけたのが登録制ではないだろうか

参考文献

- ・奥田実紀(2007)『タータンチェックの文化史』白水社
- ・奥田実紀(2013)『タータン・チェックの歴史』河出書房新社
- ・Clocomi(2015/10/13)Let's study 播州織「ロイヤルスチュアート」
<http://clocomi.jp/2015/10/13/%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%A8%E3%83%81%E3%83%A7%E3%83%83%E3%82%A1%E3%80%80%E3%83%AD%E3%82%A4%E3%83%A4%E3%83%AB%E3%82%B9%E3%83%81%E3%85%A5%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80%80/> (2018/1/11アクセス)

参考文献

- Clocomi (2015/10/8) Let's study 播州織「ロイヤルスチュアート」
<http://clocomi.jp/2015/10/%e3%83%ad%e3%83%96%e3%83%bb%e3%83%ad%e3%82%ac%e3%82%af%e3%83%bc%e3%82%bf%e3%83%b3/>
(2018/1/11アクセス)
- Touch the Heartstring (2013/9/20) 「伊勢丹チェック」
http://www.team_lens.com/heartstrings/2013/sepember/2013_0920.html
(2018/1/11アクセス)

参考文献

- FASHION NETWORK (2016/9/9) 「ヴィヴィアン・ウエストウッド×ジョンストンズ マックアンドレアス柄のコレクション発売」
<http://jp.fashionnetwork.com/news/-ヴィヴィアン-ウエストウッド-ジョンストンズ-マックアンドレアス柄のコレクション発売,730285.html#WlemabpuLmj>
(2018/1/11アクセス)

7. 150398 高野滉平



・ 研究テーマ
イギリスではロンドン東部で主に用いられている「コックニー」という方言について研究した



・ 動機
▶ 英語と社会階級には相関がある
▶ ベッカムの使う英語がコックニー
▶ イギリス英語のスラングへの興味
というのが動機である



・ 研究方法
▶ 使用言語にコックニーが存在する ATM の実使用
▶ ロンドンでのアンケート調査を軸に行った

①COCKNEY適用のATM調査

- 2009年にイギリスのバンク・マシーン社が、英語とCOCKNEYを選択できるATMを導入
- 「ロンドンの地元民が面白がってくれるようなATMを作りたい」という社長の思いから、最初は3か月の運用を予定していた
- ロンドンオリンピック開催時に観光客が混乱したという逸話も
- イギリス国内のニュース・サイトから情報を得て片っ端からその所在地を調査し実際にお金をおろす

・ATM 調査について

この ATM は 2009 年にロンドン市民の注目を誘うために作られた

ロンドンオリンピックでは観光客を困らせたという話もある。

この ATM を探し出して、実使用する

結果

- 73 Commercial Street, London, E1 6SD ~同じ型のATMを見つけるも言語設定が変更
 - 24 High Street, Walthamstow, London E17 7LD
 - 197 Mays Lane, Barrow, EN5 2DY
 - Marco Service Station, Hatch Lane, Chingford, London, E4 6LP
 - 447 Roman Road, London, E3 6JX
- ↑4か所はそもそもその場にATMすら発見できなかった、もしくはATMはあっても別の会社の運営しているATMに変わってしまった。



・結果

コックニーを使える ATM が無くなってしまっていたため、調査が出来なかった

②ロンドン(東部)でのインタビュー

- Have you ever had a hard time talking with others in Cockney?
- Have you ever encountered any slang which you didn't understand when talking with others in Cockney?
- Are you proud of being able to speak Cockney?
- Have you ever encountered any accents or slangs you didn't understand when talking with others in English?
- Yes - How did you deal them with?

・インタビュー内容

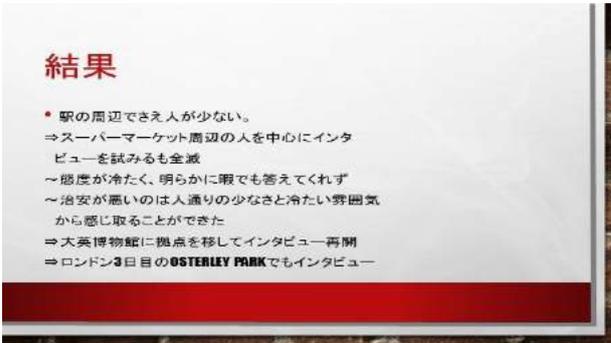
- コックニーを使って話すときに苦労したことはありますか？
- コックニーを使って話す際に、知らないスラングに遭遇したことはありますか？
- コックニーを使うことに誇りを持っていますか？
- 英語で話す際、分からないアクセントやスラングに遭遇したことはありますか？
- はい-ではどのように対処しましたか？



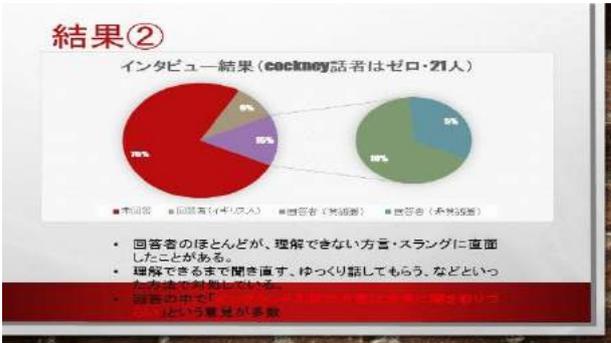
- ・インタビュー場所
イルフォードとバジルドンでアンケートを行った



- ・ハックニーについて
パーキング、バジルドンに向かう際、ハックニーと呼ばれる地区を発見した
コックニーと何らかの関係があると思い、場所を変更した



- ・ 結果
人が非常に少なく、雰囲気も悪いことから何となく治安が悪いのは感じ取れた
調査拠点を大英博物館とオスターリーパークに映す



- ・ 結果②
コックニー話者は0だったが、興味深いデータが取れた
・ 分からない方言・スラングに遭遇したと答えた人がほとんど
・ 対処方法は理解するまで聞き直す、ゆっくり話してもらうというものだった
・ イングランド北部の方言は非常に聞き取りづらいと答える人が非常に多かった

北部の方言について

- **SCOUSE** —LIVERPOOLの方言
- TERを「ラー」と発音 **EXIWATER**
- 子音Tを「チ」と発音 **EXINIGHT**

- **GEORDIE** —NEWCASTLEの方言
- USを「ウス」と発音 **EXIBUS STOP**
- EIGHを「イー」と発音 **EXIEIGHT**
- MYを「ミー」と発音 **EXIMY BROTHER**

- ・ イングランド北部の方言
- ▶ Scouse-リヴァプールの方言
ter を「ラー」と発音し、
子音 t を「チ」と発音
- ▶ Geordie-ニューカッスルの方言
Us を「ウス」と発音
Eigh を「イー」と発音
My を「ミー」と発音

JAMIE OLIVER

- イギリスのセレブリティシェフ
- アメリカでの食体験をきっかけにイギリスの公立学校の給食改善運動を進める
- ESSEX出身だが、COCKNEYを話す

⇒ パブを経営する両親の元に生まれた
～階級的な問題？

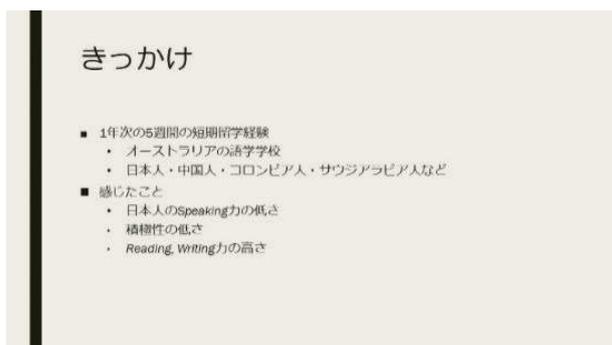
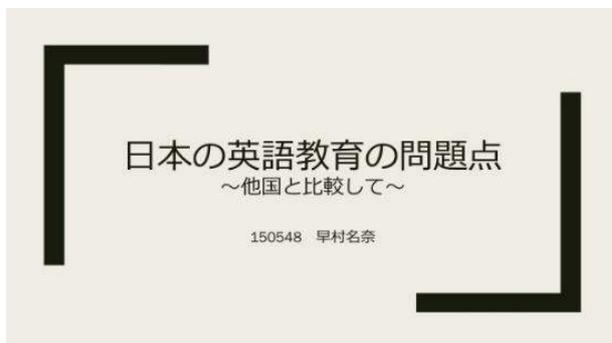


(https://www.youtube.com/watch?v=2016_09/09/jamie-oliver-cockney-recorder)

- ・ JAMIE OLIVER
- ▶ イギリスのシェフ
- ▶ アメリカでの食体験をもとに、イギリスの給食改善運動に乗り出す
- ▶ エセックス出身だが、コックニーを話す
- ▶ パブを経営する両親のもとに生まれたために、階級的な問題が存在するのではないか

ご清聴ありがとうございました

8. 150548 早村名奈



・ 動機

▶一年生の頃にオーストラリアに短期留学した



そこで様々な国の人に混ざって、勉強していたから

▶感じたこととして

日本人は英語を話す力が低い
積極的に話そうとしない

逆に読む力、書く力は高い

というものがあつた

仮説

日本人のSpeaking力の低さは
“日本の英語教育の方針に問題がある”

“日本の英語教育が文法重視志向であるからである”

“日本の英語教育の始める学年が遅いからである”

- ・ 仮説
- ▶ 日本人の話す力が弱いのは
英語教育の方針に問題アリ
教育方法が文法に偏っている
から
英語教育の開始学年が遅いから
ではないか

英語教育の目的

文部科学省 英語教育改革総合プランより

“経済・社会のグローバル化が進展する中、
子供たちが21世紀を生き抜くためには、**国際的共通語**となっている
「英語」のコミュニケーション能力を身につけることが必要”

- ・ 英語教育の存在意義
グローバル化の進行により、英語
におけるコミュニケーション
力をつけることが必要不可欠に
なった

英語教育の実態

- 小学校での英語教育
- 2011年まで
 - ・ 英語活動は総合的な学習の時間（5年生から）
 - ・ 必修ではない（平均28.2時間/年）
- 2011年以降
 - ・ 小学校5、6年生の英語活動が必修化（総合的な学習の時間）
 - ・ コミュニケーション偏重教育
（コミュニケーションを図る態度の育成、音声への慣れ）

- ・ 小学校での英語教育
- ▶ 2011年まで
英語活動は総合の時間としてと
らえられており、必修科目ではな
かった
- ▶ 2011年以降
英語活動が必修科目になったも
のの、コミュニケーションに偏り
がちな教育となっている

問題点①英語教育全体の趣旨の比較

- 日本：国際教育の一環として
- 中国：国民的発展のための国際人の育成
- 韓国：インターネット時代の国際語である英語をマスターし、世界競争に勝つ
- 台湾：人材を育成して国際社会で生き残っていく

→日本以外の3カ国は国際社会に通用する人材の育成

- ・ 問題点（英語教育の意義）
 - ▶ 日本 国際教育の一部分と捉えている
 - ▶ 中国 国際的人材育成の一環
 - ▶ 韓国 世界で通用する人材育成
 - ▶ 台湾 国際社会人材の育成
- このように日本以外は人材育成の面に重点を置いている

問題点②技能目標の比較

- 日本：4技能のなかで音声によるコミュニケーションの重視
- 中国：4技能をマスターし、総合的言語運用能力の形成
- 韓国：4技能を総合的に指導
- 台湾：4技能を相互に牽連させること

→日本以外が4技能の方を身に習けようとしているが日本は4技能のバランスを無視している

- ・ 問題点（獲得能力の相違）
 - ▶ 日本 コミュニケーション能力重視
 - ▶ 中国 英語の総合的運用能力を養う
 - ▶ 韓国 総合的な英語力の育成
 - ▶ 台湾 総合的な英語力の発達を目的
- 日本以外の各国は総合的な英語運用能力を目標に置いている

表1: 中国の英語教育標準 (2017年)

レベル	1年	2年	3年	4年	5年	6年
聴解	✓	✓	✓	✓	✓	✓
読解	✓	✓	✓	✓	✓	✓
聴話	✓	✓	✓	✓	✓	✓
読話	✓	✓	✓	✓	✓	✓
書写	✓	✓	✓	✓	✓	✓
言語運用能力	✓	✓	✓	✓	✓	✓

表2: 日本の英語教育標準 (2011年)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
聴解	✓	✓	✓	✓	✓	✓
読解	✓	✓	✓	✓	✓	✓
聴話	✓	✓	✓	✓	✓	✓
読話	✓	✓	✓	✓	✓	✓
書写	✓	✓	✓	✓	✓	✓
言語運用能力	✓	✓	✓	✓	✓	✓

問題点（始学年、授業時間の比較）

- ▶ 日本 5年生から週1時間
 - ▶ 中国 1年生から最低週4時間
 - ▶ 韓国 3年生から週1時間
5年生から週2時間
 - ▶ 台湾 3年生から週2, 3時間
(1コマ=40分)
- 日本は開始学年が遅く、学習時間も少ない

問題点③開始学年、授業時間の比較

- 日本：5年生から、週1コマ
 - 中国：1年生から、週最低4コマ以上
 - 韓国：3年生から、3,4年生は週1コマ、5,6年生は週2コマ
 - 台湾：3年生から、週2~3コマ（地域によって異なる）
- *1コマ=40分

→日本は開始学年が遅く、コマ数も少ない

アジア以外の国々と比較してみても、日本の英語教育開始学年は遅い

4. Results of “Brexit” Interviews 2017

今回研修に参加したゼミ生（阿部、大木、小野、三仙、高野）は24日間の研修で訪れた4都市（ケンブリッジ、ロンドン、オックスフォード、エディンバラ）にて、昨年引き続き Brexit に関するインタビューを行った。また先輩の葉玉さんにも、滞在していたリバプール、グラスゴーにて調査に協力していただいた。以下、その調査結果を報告する。

○導入

- ・ Brexit とは “British” + “Exit”、イギリスの EU 離脱を指す
- ・ 国民投票（2016/6/25）の投票結果
～賛成派：51.9%／反対派：48.1%
⇒離脱が決定
- ・ 2017/1/17、メイ首相が EU 離脱の意向を正式に表明
- ・ 2019/3 に離脱予定

○動機

- ・ 昨年度の調査から1年経ち、世論に変化があったかを確認するため。
- ・ 昨年の先輩方がアンケートを実施していることから、調査結果を比較しやすいと考えたため。
- ・ 今研修ではイングランドだけではなくスコットランドでも調査が可能であり、地域間で異なる意見を得られる可能性があると考えたため。

○（参考）昨年度のアンケート結果

昨年度は標本として43人からの回答を得た。内訳としては、賛成派8人、反対派33人、不明2人であった。この結果を参考に、今年度の結果と比較したい。

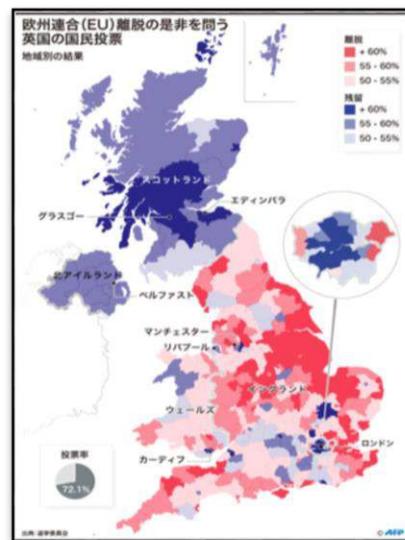


図1：Brexitに関する国民投票の地域別結果

参照：AFP BB News 『【図解】EU離脱の是非を問う英国国民投票、地域別の結果』

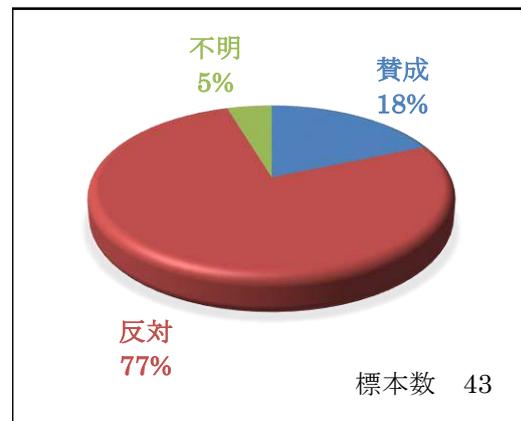


図2：アンケート結果（2016）

○質問内容

- ・ Brexit に賛成か反対か
- ・ 賛成（反対）する理由

○アンケート結果

標本として 75 人から回答を得ることができた。内訳としては、賛成派が 17 人、反対派が 53 人、不明が 5 人となった。

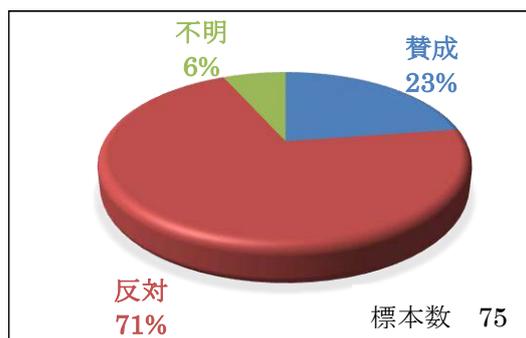


図 3: アンケート結果 (2017)

○主な賛成意見

性別	出身	理由
男性	フィリピン	賛否はあって当然だが、自分の置かれている状況次第（自分には利益があるし国全体もよくなる）
女性	ロンドン	他の国と同じルールの下で暮らしたくない
女性	イングランド	経済的な側面でしか欧州に関与してなかったのにならしか政治的に介入してイギリスが悪い方向へ行った
男性	スコットランド	個人的には住みやすくなるので利益のほうが大きい
女性	アメリカ	アメリカと EU で交渉するのも構わないがアメリカとイギリスで 1by1 の交渉をしてもメリットは大きい
女性	スコットランド	EU はイギリスへの要求が多い
女性	イングランド	不明
男性	ヨーク	イギリスの思うようなルールを EU では作れない
女性		決定事項だから期待するしかない
男性	ロンドン	イギリスはイギリスでやっていける
女性	スコットランド	もう決まったことだから
女性	スコットランド	個人にとってはよくないが、国全体にとってはよい
男性		自国にお金を使える
男性	イングランド	イギリスはオンリーワンでなきゃ
男性	スコットランド	EU のイギリスへの要求が多い

○主な反対意見

性別	出身	理由
男性	ケンブリッジ	民主主義の弊害⇒人々の心理を反映してしまう国民投票は方法として正しくない
女性	イングランド	イギリスにいてこそ EU だから

女性	デンマーク	貿易面で EU にいることのメリットが大きい
女性	フランス	EU にいることで経済的なアドバンテージを得られているはず (なのに)
男性	エディンバラ	離脱することで被る損害が多すぎて天秤にかけたときにトータルでは良くない
女性	イングランド	欧州のメンバーのアイデンティティを保持すべき
女性	イングランド	得られるものが少ない⇔不利益は多い
男性	スコットランド	イギリス人としての答えはノー ⇒若者の為にもスコットランドの独立の方が大事!
男性	ケンブリッジ	経済に対する悪影響が大きすぎてイギリスの経済崩壊はしてしまう
男性	ケンブリッジ	イギリス政府を信用できないから残るべき
女性	ケンブリッジ	他国にイギリスは多文化を受け入れない国だという印象を与えかねない
男性	エリー	ヨーロッパ人としてのアイデンティティを失ってしまう
女性	ケンブリッジ	国際的な学生の窓口となっているのに教育的な職業はどうなってしまうのか
女性	南アフリカ	国境をコントロールするには好都合だが、自由貿易の面では国境への意識を強めることで不利益か
男性	イタリア	ヨーロッパの象徴的な存在なので離脱すると様々なイメージの崩壊につながりかねない
男性	ブラジル	イギリスはわがままだ
女性	スコットランド	スコットランドがイギリスから離脱しようとしている背景を踏まえても EU 離脱は理解できない
女性	スペイン	EU 諸国に住むイギリス人、イギリスに住む EU 諸国の人々への相互利益がないのでは?
男性	フィリピン	EU を 1 つの塊としたとき、その中でずっと中心だったイギリスが抜けるのは普通に考えておかしい
女性	イングランド	EU にいたから雇用の面で利益を被っていたはず (なのに)
女性	フランス	他の EU の小国が都市に出て行くチャンスが減ってしまうのは良いとはいえない
男性	イングランド	得ている情報が多い分、信用度が薄れてきている
女性	フランス	人やモノの自由な行き来がなくなってしまうのでは

		ないか
女性	イングランド	EU にいることで農業、雇用といった様々な面で利益を得てきた（のに）
女性	ドイツ	イギリスがナンバーワンであるということは決してない（勘違いしているのに）
男性	オックスフォード	経済を回す上でこの決断は痛すぎる
女性	ブラジル	税金に大きな変動があると困る
男性	オックスフォード	国外からの情報が多すぎて現状どれを信用すればいいかわからないのになぜこの決断をしたのか
男性	ロンドン	社会主義への恐れがある
男性	ロンドン	EU 出身のイギリス在住の人々が困る
男性	ロンドン	ボーダーレスの方が国を豊かにすると考えている
男性		世代で意見が異なっている
男性	イングランド	投票行為自体が国民の総意ではない
女性	グラスゴー	EU の制度はイギリスに適していたから、EU に従うべき
女性	スコットランド	安全面で不安がある
女性		不明
男性	スコットランド	EU 出身のイギリス在住の人々が困る
女性	ヨーク	EU は団結する必要がある
男性	リバプール	気軽に海外に行きたい
女性	ロンドン	仕事への影響
男性	イングランド	雇用の面での不利益への懸念
男性	イングランド	貿易の面で制限がかかる
女性	スコットランド	気軽に海外に行きたい

○不明意見

性別	出身	理由
男性	スコットランド	興味がないから
女性	イングランド	不明
男性	アメリカ	自国と関係がないので

○考察

データから、まずは様々な環境や条件があったとはいえ、比率的には昨年より賛成が微増しているという結果が得られた。具体的な傾向として、イングランド出身者をはじめとするイギリス人は軒並み EU 諸国と一緒にいるべきではない、あるいは至上主義的考えからイギリスはイギリスであるべきだと主張する流れがあったことが見て取れる。また、一部の国民が投票結果を受け入れる流れが生まれていることもデータの一部から分かった。

しかしそうした流れがある一方で、やはり反対意見がかなりの比率を占めているのはデータからも自明である。イギリス人の意見としては、EU のメンバーであることで得られている利益（自由貿易、経済、雇用、教育、農業 etc.）が失われることを危惧する声や、政府やあふれる情報を信用できないという意見が多い傾向にあった。EU に所属する他国の出身者の意見としては、自由な移動ができなくなることなど、象徴的存在の離脱で生まれる悪影響への懸念が大半を占める一方、イギリス至上主義を否定する意見もあった。さらに EU に属さない国の出身者は、俯瞰して考えたイギリスのイメージについて冷静な意見を主張する方が多かった。

今回インタビューを通じて、ごく当然のことなのかもしれないが様々な考えがあると実感した。中でも特に今回のインタビューで印象的だったのは、自分のアイデンティティ（イギリス人であること、もしくはイングランド人なのかスコットランド人なのかといったようなことなど）が観点に大きな影響を与えている点である。例えばスコットランドのタクシー運転手の方は、Brexit についてどう考えるかというよりは、スコットランドの若者たちのためにイギリスから自国が独立することについての関心のほうが強いと回答して下さった。これは、自分がイギリス国民であることよりもスコットランド人としてのアイデンティティに対する帰属意識が高いからであるといえるのではないだろうか。そして何より、インタビューを通じて「イギリスとはこうあるべきだ」という個々人の思いが、賛成や反対する理由と関係しているという印象を受けた。日本と比較しても政治に関する関心度は圧倒的に高いことを実感すると同時に、Brexit が国民にとって重要な出来事であるということを再認識することができたように思う。

インタビューを通じて良かったのは、「イギリス内部から見た Brexit」「EU から見た Brexit」「さらに俯瞰して見た Brexit」と 3 パターンの標本を得ることで、よりバラエティに富んだ説得力のある内容となった点である。インタビューを行った場所が大英博物館をはじめとするミュージアムや、クライストチャーチといった建造物等、イギリスを代表する観光地に集中した結果と言えよう。ただこのことは裏を返せば、対象があまりにも多国籍過ぎた、という課題と捉えることもできるだろう。イギリス人の意見をより明確に表すのであれば、もう少しローカルな場所でのインタビューも敢行すべきだったのかもしれない。いずれにせよ、我々の研修の 1 つの大きな目的として Brexit に関する調査として一定の成果を得られたことは大きな収穫だったと言えるのではないだろうか。

5. The Diary

7/30(日) 成田空港—Gatwick 空港—Cambridge

・初めての外国だったので少し緊張した。香港で初めて英語を使って話したが、うまく伝わらなくて苦労した。

・初日は午後から街を散策。大好きなグミ HARIBO を買ったが、2割ほど袋が開いており、棚に散乱していた。卵も割れていた。

・イギリス最初のご飯はフィッシュ&チップス。イギリス料理がまずいという概念は否定できないが肯定もできないなという印象を受けた。確かに味はないが、素材の味はかなり良く、自分で味をつけさえすれば非常に美味しかった。ただケチャップが有料なのは痛い。

・イギリスに着いてまず感じたことは気候が夏にも関わらず、暑すぎずとても過ごしやすいことである。街で歩いている人などを見かけると人によってコートを着ている人もいれば、半袖の人もいるなど日本では珍しい光景を見ることができた。また移動中の窓から見える景色はほとんどが牛や羊を育てている牧場であった。

7/31(月) ARU

・学校が始まる。授業は中国人とのグループ授業で、中国人はよく発言をし、積極的だった。

・メンバーは YCU と中国人のランチンの 8 人。オリエンテーションで学生情報について知った後は中国人の学生（西安大学？）と合流。中国人に対するイメージは無愛想でマナーが悪いといった感じだったが、接しやすいしフレンドリーで好印象であった（今のところ）。

・中国人は日本人より友達に対してスキンシップが多めであった。

8/1(火) ARU

・ランチに日本食レストランへ。クラスメイトのランチンに、日本人は食べるときに音を立てないね。と言われ、周りをよく見ると、皆の咀嚼音が気になった。物を食べる音をあまり気にしたことがなかったので、海外に行くとき、麺類はすすらないなど基本的なマナーを覚えようと思った。

・授業を終えアクティビティで Ely へ。驚いたのは、電車が平気で遅れ、遅れが出ること。それを教えるアナウンスもなく、いつ来るのか不安になったほどだった。乗ってみて面白かったのは、通路を挟んで右と左とで椅子の向きが違ったことだ。何の意味があるのか。Ely は小さい分、歴史が凝縮されたような不思議な町だった。

・ショッピングとトリニティカレッジに行った。Cambridge の中心部ということで非常に人が多かった。

・大学の近くの公園にサッカーをしにいった。公園がとても広く様々なスポーツをやっている人達がいた。ベトナムに行ったときも公園で大人から子供までが遊具で筋トレをしたりセパタクローをしていたりした。使える土地が少ないというのもあるが、日本の公園環境は全く整っておらず、運動不足になる人が増えるはずであると思った。

8/2(水) ARU

・ 授業 3 日目。ここまで受けて思うのは、日本に比べて明らかに導入のアクティビティの量が多いこと、授業内容がライトなこと。普段日本で受ける内容の 2/3 くらいの内容で先生が heavy と言った時は少し呆気に取られた。しかし授業後にはかなりの充実感があり、主眼の置き方でこうも感じるものが違うのかと感心している。

・ 駅に行こうとしたら、1 時間以上かかってしまった。バスに乗ったら、来た道を帰ってしまった。イギリスのバスは先払いなので、現金を慌てて用意して乗客をイライラさせてしまった。

・ 中国人と一緒に授業を受けているが、中国の方々はみんな英語がうまくて正直うらやましかった。

・ 買い物に行く途中雨が降っていた。イギリスに来てから晴れていたが急に雨が降ってくるなど天気が変わりやすいということを感じていた。しかし、この日は本格的な雨が降っていたにも関わらず傘をさしているのは半分くらいの人であった。雨に濡れることにあまり抵抗がないのかなと思った。また、他人の傘を転々としながら移動している人がいて、イギリス人の社交性も感じる事ができた。

8/3(木) ARU

・ 授業で、イギリスで有名な料理研究家？について学んだ。それまで男性が料理することはあまりなかったが、彼の影響で料理をする男性が増えたことを知り、日本のジェンダー観に似ていると感じた。

・ 午後の活動でケンブリッジ大学のボタニカルガーデンを訪問した。管理されていながらも、自然景観に近い形で多くの植物があり、見ていて飽きなかった。また、芝生が至る所にあるのだが、どこを見てもきれいで整備されている。日本では考えられない光景なので、単純にうらやましいと思った。

・ 日本のガーデニングとは違い、しっかりと花の位置や木の位置が考えられており、感動した。

・ 自然のなかで父親が子供に絵本を読んでいる光景が目にとまった。こういったところから庭を大事にする意識が生まれているのではないだろうか。またそういった人達は家族連れというわけではなく、父と子供だけという構図であった。これはなぜなのであろうか。

8/4(金) ARU

- ・パナマ人と自己紹介をし合った。うまくしゃべることができなかったが、英語を通じて会話ができて、自分の世界が広がる楽しさを知ることができ、とても楽しかった。
- ・スペイン語圏独特の訛りと聞き取れない程の速い英語に圧倒され、これが積極性か！と刺激を受けた。夕方からはその時知り合ったサッカーマン（パナマのプロらしい）や突然乱入したブラジル人とサッカーをした。フットボールは国境を越えて愛されるスポーツだと再認識した。
- ・サッカーはいろいろな人を繋いでくれると肌で実感できた。少しサッカーを一緒にするだけで心が開放的になり会話をはずむようになった。

8/5(土) 観光—London

- ・London に行った。バッキンガム宮殿の前で警察が馬に乗って警備をしていた。観光名所だからだとは思いますが不思議な光景であった。ロンドンには観光客など人が多すぎると感じた。
- ・大都市のロンドンでも、高いビルではなく伝統的な建物であふれており、イギリス人の建物文化の良さを知った。
- ・事件が起きた。前日に気持ちよく別れたと思っていた西安大学の生徒達が、パーティーで盛り上がった後そのまま片付けせずにカレッジを後にしたようで、あまりの汚さにスタッフに食器を全て没収され、食べ物も捨てられてしまったのだ。言うべきことは言わないと通じない、察することのない文化に触れた瞬間だった。

8/6(日) Cambridge 散策

- ・以前サッカーをした広場でタイ・フェスティバルが行われていたので昼食がてら行ってきた。パッタイや豚の串焼きなど、様々なタイ料理を堪能し、タイ文化に触れることができた。まさかイギリスで仏教の僧を見ることができるとは思わなかった。
- ・みんなでショッピングへ行った。イギリスのショッピング街は閉まるのがはやく、ほとんどが 17 時にはしまってしまう。もう少しあけていれば儲かるはずなのに、と行ってしまった。
- ・セレクトショップに買い物に行って服装を店員さんに褒められたのがうれしかった。イギリスの人に服装を認められた気がした。

8/7(月) ARU

- ・ストーン・ヘンジについて学んだ。ただの岩の集まりという知識しかなかったけれど、紀元前に人々が、様々な技術を駆使して作り上げたものだと知り、また日照時間によって様々な表情があり、行ってみたいと感じた。

- ・ケンブリッジにある野球場に行った。野球場に向かう途中にはラグビーのフィールドや、サッカーのフィールドも存在しており、広場の広大さに驚かされた。
- ・日本料理のお店で照り焼きチキン丼を食べた。イギリスに来て食べた食べ物の中で1番まずい気がした。味がないものより、味を知っているものとギャップがあるものの方がまずく感じると思った。
- ・今日はイギリスの買い物事情について書きたい。もう一度きれいな芝でサッカーがしたくて、血迷ってスパイクを買った。物価の高いイメージがあるが、モノによっては日本より格段に安い。お菓子や飲み物については、日本にも劣らない品揃えだった。ただ何より円安なので普通にポンドで支払うと金銭感覚が狂ってしまう。

8/8(火) ARU

- ・午後のアクティビティはまさかのパブツアーだった。日本で授業の一環で酒を飲むことなんてそうないので面白かった。**Cambridge**の地ビールを飲んだのだが、日本に比べ炭酸の薄さ、そしてまさかの常温での提供に愕然とした。しかしとても飲みやすく、割とすぐに酔っ払った。意地で最後まで残ったが少し後悔した。
- ・サイダーがとてもおいしかった。
- ・ビールとサイダーを飲んだがどちらも日本にはない独特の味がした。また、ショーンはお酒をそんなに飲めないと言っていたが日本ではお酒が強い部類に入るくらい飲んでいて欧米の人はお酒が強いと感じた。

8/9(水) ARU

- ・あまりに印象的だったので昨日の午前の授業について書きたいと思う。昨日はイギリスの方言について学習した。まさに自分の研究したいことであり、先生に直談判したのでもちろん楽しかったのだが、**Cockney**のほかに**Geordie**や**Scouse**といった方言も学ぶことができ、まだまだ知識が足りないと感じたいい機会となった。
- ・パンティングを行った。ケンブリッジという名前の通り、川沿いに歴史的な建築物が多かった。その後公園で読書をしていたら、ギターでビートルズの**Let it be**の弾き語りをしており、音楽と綺麗な景色で、とても感動してしまった。同じ気持ちの人が多かったのか、彼のギターケースには多くのコインが入っていた。
- ・レストランの消費税が高いこと、チャージ料が含まれていたらチップを払わなくてよいことを学んだ。
- ・中国人留学生のランチンと大富豪をした。ルールを英語で説明されて普通は戸惑うはずなのに、戸惑うことなくゲームに参加したランチンに驚かされた。英語ができるランチンが羨ましく思えた。

8/10(木) ARU

・ミッシェルの夫の作った **Cambridge** の情報誌を読んだ。移民が多いことにも驚いたが、戦争によって人生が大きく変わり、イギリスで幸せに暮らしている人々を知って、大事な一種の異文化体験をすることができた。

・EU 離脱の点からみてもイギリスではあまり移民に対して良い印象は抱いていないと思っていたが、うまく共存できている人達もいて移民にはよい側面もあると学ぶことができた。

・プレゼンテーションづくりに苦勞した。何せ外国の方に日本の文化を伝えるのは初めてで一体どうやったら分かりやすく伝わるか考えているだけで頭が痛くなった。

8/11(金) ARU 最終日

・最後の授業では、プレゼンテーションを行った。前日に決まったため、十分な準備ができなかったが、あれほど前日に原稿を読む練習をしたのに、上手くしゃべれず、人前で英語を喋るいい経験になった。

・かなり準備して臨んだとはいえ出来は正直あまりよくなかったと思う。しかしミシェルはそんなプレゼンでも良いところを探してくれて、しかも褒めてくれた。ここに日本とイギリスの教育文化の違いを感じた。イギリスでお持ち帰りは **Doggy Bag** というらしい。人間が食べるのに、である。

・ランチンとのお別れも間近に来ていた。みんなでプレゼントを持ち合い、それをランチンに渡した。初めて国境を越えた友情というものを感じ取れた気がした。また会いましょうランチン。

・帰ってからも継続的に英語をしっかりと勉強しなければいけないと再確認できた。

8/12(土) FW~London

・ロンドンへ移動中に乗ったタクシーの運転が荒く、道もあやふやにしか知らなかった。有色人種のドライさ、ビジネス感に触れた経験だった。

・午後にロンドンへ行った。先輩と合流し、スポーツバーへ。観客は私たち以外にほとんどいなかったが、ダーツやビリヤードをしている人たちも点が決まると盛り上がっていた。バーでは必ず年齢確認をされ、日本より飲酒に対する規制は厳しかった。

・初日はウェンブリースタジアムの見学だったが、とても感動した。とても多い観客席に囲まれるフィールド、奥が深い歴史に驚くばかりであった。

・ロンドンで古着屋に行った。日本発のブランドであるコムデギャルソンの古着がイギリスでもかなり高く扱われていたことに日本人として嬉しく感じた。

8/13(日) FW~London

・V&A 博物館に行った。ファッションは社会を大きく映していると気付いた。その後はアフタヌーンティーをした。お昼ご飯を抜いたのに、満腹で上段（ケーキゾーン）は一口

も食べられなかった。

- ・時間の関係で見ることができたのはファッションの展示のみであったが、第二次世界大戦後にブランド物の家庭への浸透が始まったなど様々な知識を知ることができた。

- ・ロンドン 2 日目。この研修の中で 1 番個人的に重要なインタビューと現地調査を行った。ATM を 10 は廻ったが、目的としていたモノは見つからなかった。インタビューで東ロンドンへ行ったが、まず人がいない。先生のおっしゃっていた治安の悪さを、あまりにも静かな町の冷たさから痛いほどに感じた。結果も惨敗。悔しい。

- ・アフタヌーンティーを初めて味わった。アフタヌーンティーは珍しいのか、店員の方が写真を撮っていた。確かにおいしかったけど、少し重すぎると思う。

8/14(月) FW~London

- ・研究のためのアンケートを 1 日した。London はゴミが多く、せつかくきれいな建物が多いのにもゴミ 1 つで景観が台無しになってしまうのもったいないと感じた。また、日本ではホームレスに水をおいてあげているのをよく見るが、イギリスではビールが多く、なぜか気になった。

- ・イギリスに来てずっと思っていたことだが人がとても優しい。駅で困っていると必ず誰かしらが声をかけてくれる。ジェントルマンという言葉が肌で感じた。日本人よりかなり優しいし、親切である気がする。

- ・ナショナルトラストの管理するオスタリーパークに行ってきた。どこを見ても木や花ばかりで日本の公園とは比べ物にならないくらい楽しかった。公園の意味そのものが日本とイギリスでは違うのだろうか？

- ・オスタリーパークを訪問したが、正直この研修の中で 1 番印象的な場所となった。日本ではまず見られない野生の動物をたくさん見ることができたし、Cream Tea も堪能できた。そして学芸員さんの知識がボランティアとは思えないほど豊富で、勉強する楽しさを体現しているようだった。

8/15(火) FW~Edinburgh

- ・Edinburgh へ向かった。エディンバラ城に展示してある王冠がとてもきれいだった。また、地下牢や捕虜牢を見たが、兵隊と普通の人々の牢屋に大きな差があり、兵隊はあくまでもお客様という意識があることが分かった。

- ・タータン博物館へ行った。タータンが実際に作られている様子など貴重なものを見ることができた。1 番驚いたことは FC バルセロナなどのサッカーチーム独自のタータンも存在しているということである。

- ・フェスティバルを見に行った。様々な国の人々が色々な芸を行っていた。その中に日本人の芸人も居た。最低限の英語で外国の方々と会話していてとても感動した。

- ・フリンジの一角に多くの観客の前で日本人がパフォーマンスしており、誇らしく思った

一方で下ネタの連発を見てこれを日本文化だと思われたくないとも感じた。

8/16(水) FW~Edinburgh

- ・スコットランド博物館へ。スコットランドの文化はイギリスよりずっとユーモアで面白く、みていて飽きなかった。その後 ARU の先生が行っている劇を鑑賞した。言葉はほとんど聞き取れなかったが、**Brexit** による移民の戸惑いや怒りが伝わった。
- ・劇は普通の教室を舞台にしている日本ではあまり見ることができないものを見ることができた。舞台、衣装、道具すべてがシンプルにも関わらず様々なものを表していて表現力の豊さに驚いた。
- ・劇の内容があまり分からなかった。日本に帰ったらリスニング力をどうにかしないといけないと思うようになった。
- ・シンプルな分人の表現力が最大限に活かされ、それだけ心に響くと共に、日本とイギリスの文芸文化の差を感じた。

8/17(木) FW~Edinburgh

- ・街中でアンケート調査を行った。バーのテラスでお酒を飲んでいる人は皆快くアンケートに答えてくれた。フェスティバル中だからか、平日なのにお昼からバーはビールを飲んでいる人でほぼ満席、カフェはマダム、家族がアフタヌーンティーを楽しんでおり、時間の使い方が優雅だと感じた。
- ・インタビューをして思うことだが、日本と違いイギリス人は一人ひとりがしっかり政治に関して自分の意見を持っている。
- ・ホリールード宮殿でインタビューしたイギリス人マダム 3 人組が強烈だった。**Brexit** について賛成 1 : 反対 2 と意見が分かれたのだ。かなり参考になる意見を頂いた後、賛成派と反対派で熱くなったのだが、ここまで政治について当事者意識を持ちはっきり自分の意見が持てる人は日本にはそういないのではないだろうか。
- ・昨日から体調が悪く、正直あまり探索できなかった。ただ驚いたことがある。ラーメンのスープから日本酒の味がしたのだ。イギリスでのラーメンは日本とは違う。

8/18(金) FW~Oxford

- ・ブレナムパレスに行った。庭園がとてもきれいだった。フランス式のように豪勢ではないけれども、自然を細かく分析し、何世紀も先のことを考えて緻密に計算をした英国式庭園は、本当の自然になっており、とても感動した。
- ・ブレナムパレスはオスタリーパークとは比べ物にならないくらい広く、一日では回れないと言われたのも納得だ。個人的にオスタリーパーク位の広さがちょうどいいと思った。
- ・未だに貴族が暮らす宮殿からは歴史が感じられた。迷路も道を覚えるくらい廻った。ここで何より学んだのは各国の庭園の様式の違いだ。日本で多少学習し、イギリスでも何度

かガーデンを訪れたとはいえ、フランス式や日本式の庭園とイギリス式庭園の違いを深く理解できたように思う。

- ・クライストチャーチに泊まっている。今までに泊まったカレッジ、寮とは格が違うと感じたことは建物の作りはもちろんのこと、宿の部屋で入口にコートと帽子をかけるフックがついているということである。イギリスのフォーマルな服装にあったつくりになっていることに文化、伝統を感じた。

8/19(土) FW~Oxford

- ・アンケートをした後、アフタヌーンティーして、バーに行った。先輩が言っていた通り、Oxford の人はなかなかアンケートに答えてくれず、難航した。カフェではチップを要求され、チップの相場が分からず、慌ててしまったので断ったが、店員もいい人だったので渡せばよかったと後悔した。

- ・British Breakfast も研修後半から堪能できているが、やはりハリーポッターの舞台となったホールで食べる朝食は雰囲気も相まってより美味しく感じられる。

- ・パブで先生と酒を飲んだ。色々な人がパブを歩きかう中で3時間程度ずっと座っている自分たちが異様に思えた。

- ・自然史博物館に行った。タバコの展示があり、昔タバコは病気を治すために使われていたらしく現在健康を害するものとして扱われていることを考えると真逆の用法で使われていたということに驚いた。

8/20(日) FW 最終日

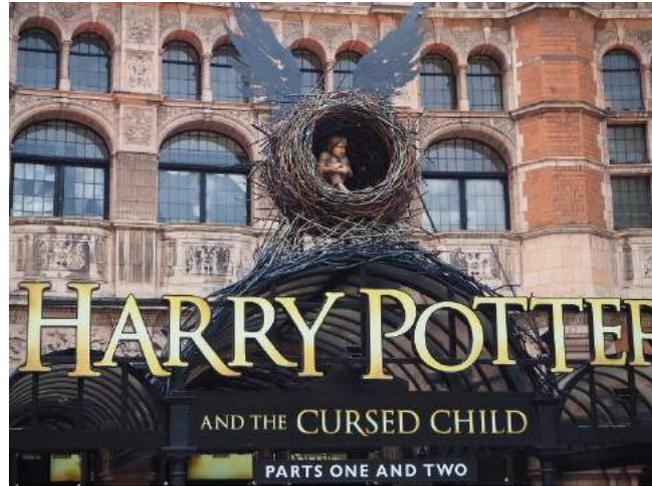
- ・時間詰め詰めながら Oxford のボタニカルガーデンへ。Cambridge との違いは、景観の在り方にあると感じた。単純に規模が小さいだけでなく、ラグビーコートが隣接しており、景観が少し損なわれているような気がして少しがっかりした。パンティングに関しても、規模・数ともに Cambridge に劣る。

- ・最終日はボドリアン図書館近くを散歩し、ランチを食べた。イギリスの食事には大抵ジャガイモがついており、とてもおいしかった。

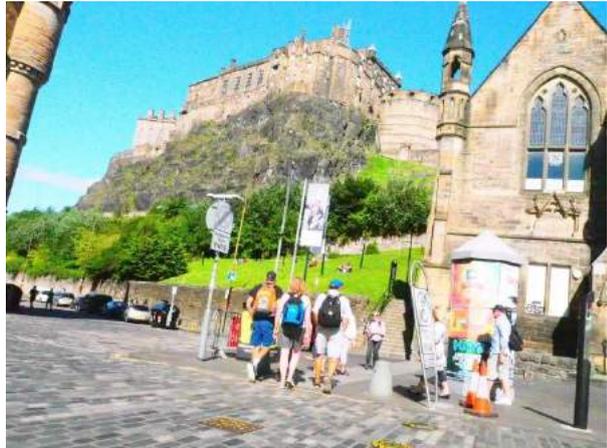
- ・イギリス最終日。公園でゆっくりしようと思い公園に行ったらかなり多くのジョギングをしている人を見かけた。公園などの運動をする場所がしっかり確保されていることにより人々が運動をする機会も増えると思うのでぜひ日本ももっと公園を広くしたりしてほしい。

- ・一人でクライストチャーチの周りを廻った。インタビューをしているとイギリス人ではない人も多く、世界中に知られている観光スポットであることを思い知らされた。

6. PHOTOS

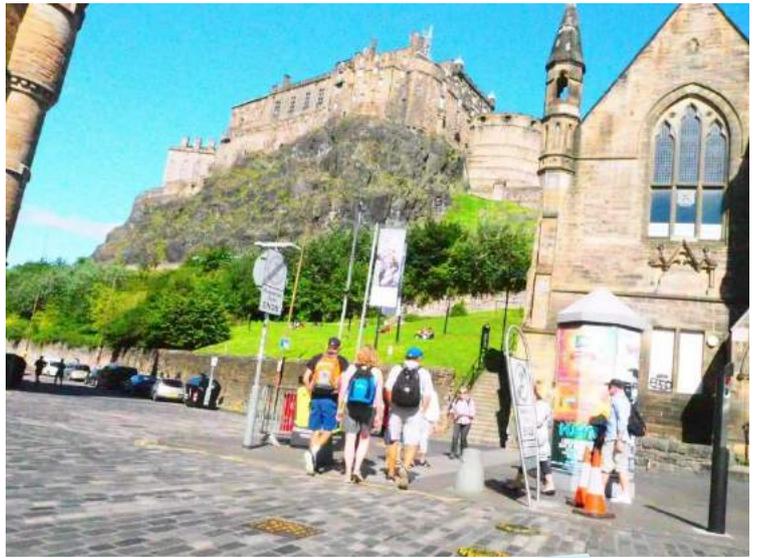
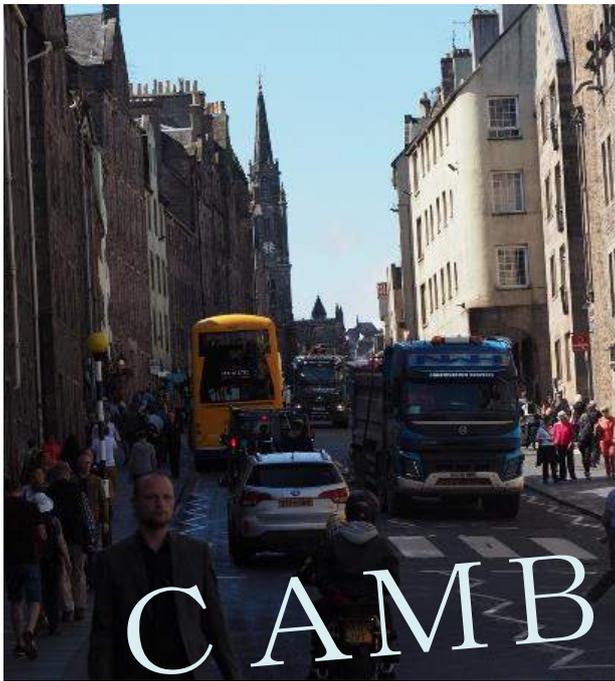






EDINBURGH







FLY



BOTANIC GARDEN





KOREA



ゼミ合宿



MELBOURNE

7. Reviews

150019 阿部幹正

アングリシア・ラスキン大学では、約 2 週間のサマーコースを受講した。主に 2 人のイギリス人女性に授業を進行していただいた。中国人グループの英語はうまく聞き取れなかったが、国籍関係なく、学生は学生らしさを持ち合わせているというように感じた。主に午前中授業で午後に大学の教員とケンブリッジ周辺の名所を巡った。中には立派な庭園や、ゲームで出てきそうな小さな町など日本では感じ得ない体験をした。この研修期間で個人的にもっともきつかったのは食事の部分であった。夕食はわたしたち全員でキッチンにて自炊することが多かったが、昼食でファーストフード店や ARU の学食的なところで食べると基本的においしくはなく、むしろまずいくらいであった。これを見る皆さんに伝えたいことは、カレーは外れがないということ。この研修期間で何度カレーに救われたかわからない。

私事のため、他のゼミ生と比べ 1 週間はやく日本に帰ったが、イギリスに滞在したこの 2 週間は一生ものだと思っている。特に日本でしか生活してこなかった私は、街中にある様々な人種や国籍の人々のことを直接目にするこゝ自体が新鮮であり、刺激的であった。また、近くの公園で行った草サッカーを通じて、国籍や世代、言語を関係なく喜びや幸せを共有できたのは有意義であった。それと同時に日本語以外の言語をもう少しうまく使うことができれば、より良いコミュニケーションが取れていたはずだと後悔もした。総じて、スポーツという娯楽が持つ影響を体感できたことは卒論研究の第一歩となったと感じている。

150050 石井玲央菜

私は韓国に 1 年間留学をする中で、異文化体験や日韓関係において議論がなされている問題についての生の声を聞くことができた。日々の生活の中で、論じられる議題としては慰安婦問題よりも領土問題について話すことが多いように感じられ、人々の関心は過去よりも現在を見ているようであった。また、日本のメディアにおいて反日のデモなどの情報が報道されており、反日的な市民が多いのではないかと考える人も多いが決してそのようなことはなく、むしろ親しみを持って歩み寄る姿勢も見られた。その一方で、日本に対する感情が日本人との関わりや旅行を通して変化したと言う人も多くおり、知日の必要性を感じた。日々の生活を通して、知日のきっかけとして多いのはアイドルやアニメなどのサブカルチャーであることを実感し、経済産業省が推進しているクールジャパン、またそれを多言語発信していくことの重要性を感じた。

それとともに韓国で生活をしていく中で、文化の違いや、意見を持つことの重要性について実感をし、自分の考えを持ち、それを発することができるようになったと考える。特に、歴史的な部分については、事実を知ることによりより深い議論ができた。

また、今回報告書を書いていく中で、イギリスについて調査することにより、イギリスの大学制度や、代表的な建造物について知ることができ、関心が高まった。特に、調査した都市のうち 2 つが有名な大学の位置する都市であり、現在の特色が大学の歴史を反映しているというのがとても面白かった。

150127 大木 頑生

イギリスでのフィールドワークを通して、日本では得られない貴重なことを学んだと思う。イギリスに行くうえで、どんなことが大切なのか、どんなことを学ぶのかをこの感想文を見て、後輩の方々には理解してもらいたいと思う。イギリスで重要なことは主に二つあると私は思っている。3 週間という短い時間を最大限に生かすためにはこの二つのことを心に留めておかなければならない。

一つ目は「積極的に話しかけに行く姿勢を崩すな」である。イギリスだけでなく他国に行く際も当てはまることだが、重要なのは言葉を扱える能力ではなく、話しかけに行くという姿勢。どんなに文法を間違えていても、おおざっぱな英語だとしても、分かってもらおうとする態度があれば、しっかりと言いたいことが伝わる。消極的な姿勢をとるのは厳禁。国籍関係なく、オドオドした人と会話したいと思う人がいるだろうか？ 結局のところ重要なのは、積極的に相手に向かって話しかけることなのだ。

二つ目は「イギリスの料理を味わえ」だ。ネタで言っているわけではない。私はイギリスの料理を通して、他文化に慣れることの難しさを学んでほしいと言っているのである。イギリスの食文化は日本とは違う。3 週間という短い期間にも少なからず、その違いが牙をむいてくるだろう。私の経験からして、1 週間もすれば、日本の料理が恋しくなるだろうと予測している。食文化の違いからこのような「飢え」が生まれる。他文化の中で暮らすとはこういった「飢え」との戦いに身を投じるということなのである。外国に行ってみないと、英語や他文化というものを実感することはできない。そういうことを感じ取れた点では、今回のフィールドワークは大成功だった。

150167 小野詩織

今回のイギリスフィールドワークを通して、肌でイギリスの文化を感じることができるとても貴重な経験をする事ができた。様々な場所に行き、現地の人にインタビューを行う事ができたという経験は、自分の中で特に大きな成果だった。質問テーマが、男女の性差や社会階級にまつわるデリケートな内容だったため、難航しないかとても不安だったが、皆とても熱心に話を聞いてくれ、自身の意見を話してくれた。もちろんはじめは、知らない土地で外国人に話しかけるという恐怖を乗り越えるのに必死だった。しかし、どのようにアプローチをすれば答えてくれるのか試行錯誤するうちに、初めは断られてばかりだったが多

くの人が耳を傾けてくれるようになった。3週間で、コミュニケーション力はかなりついたのでないかと感じている。そして質問を繰り返すうちに、ジェンダーはイギリス人にとって関心のある話題の一つであることが分かり、今後も研究を続けていきたいと感じた。イギリス小説を読むと、夫の財産に頼っていた妻や、結婚すると家で余暇を満喫する女性が多く描かれており、保守的なイギリス人は、現代においてどのようなジェンダー意識を持っているかとても興味があった。しかし、多くの人たちは日常生活において全くジェンダーの軋轢を感じておらず、それを目の当たりにしたのが大学の職員室である。その職員室では、半分以上の教員が女性であり、結婚や出産を経験しセカンドキャリアとして活躍している中年層の女性が多いことが印象的であった。データや数値だけではなく、実際に光景を見ることができたことに大きな価値を感じた。

3週間を経て、自分の勉強不足やコミュニケーションをとる難しさを痛感した。普段英語に触れる機会はあるものの、日常的に話さなければ簡単なフレーズも出てこないということが分かり、勉強法を見直すいい機会になった。総合的に、かなり実りのあるイギリス研修だったと感じている。今回の経験を活かし、今後の研究にもしっかりと向き合っていきたい。

150321 三仙淳誠

3週間という短い期間ではあったが、イギリスでの語学研修やフィールドワークを通して様々な異文化を感じることもできた。何よりも肌で感じたのは気候についてである。同時期の日本と比べるととても湿度が低く涼しかった。晴れていると思ったら急に雨が降ることがよくあるなど日本とは全く違った気候であった。このような気候が日常だからかもしれないが、雨が降っても傘をさしている人は少なかった。折り畳み傘を持ち歩くべきではないかと思った。また、晴れているときはとても暖かいが雨が降り出すと急に体感温度が下がったように感じた。そのせいかもしれないが街を歩いている人をみると半袖の服を着ている人もいればコートを着ている人もいるといった、日本で言う季節感がバラバラの服装が目立った。

これらの経験を通して私が考えたことはイギリス人にとっては雨に濡れることにそれほど抵抗がないのではないかということであり、またイギリス人にとって季節にあった服装というよりもどの季節であっても自分の好きな服を着ることが当たり前なのではないかということである。はじめはこれらのことに対して違和感を抱き、自分たちが正しいと考えていたが、フィールドワークを経て文化が違えば正解が同じとは限らないと考えるようになった。

また、事前研究を通して主に私はタータンやファッションのことについて調べた。他の人はスポーツや教育、方言など様々な角度からイギリス文化を見ていた。フィールドワークでは天気による文化の違いに気付くことができた。物事を捉えるには様々なアプローチ

があると事前学習やフィールドワークを通して実感することができた。様々な視点を持つことも固定観念にとらわれないための手段であると考えさせられた。

150398 高野滉平

今回のイギリス研修では、日本にない様々な文化や日本で学ぶものとは少し異なるイギリス英語を体験でき、充実した日々を送ることができた。前半の **Anglia Ruskin University** での語学研修では、様々な側面からイギリスの文化について学ぶことができたが、ゲームを通じた学習が多く盛り込まれていたため日本との教育法の違いを楽しめた点でも非常に貴重な経験だったように思う。また、自分の研究内容に関連したことを学びたいというリクエストに応じて下さるなど、フレキシブルなカリキュラムも非常に魅力的だった。他のゼミ生や参加者との生活も、文化の違いからくる問題やハプニングなど大変なこともあったが楽しむことができ、良い経験となった。後半のフィールドワークでは様々な文化に肌で触れることができたが、特に自然景観の面での学びが大きく、**Osterley Park** をはじめとするナショナルトラストでは野生のオウムやカササギに目を奪われ、オックスブリッジのボタニカルガーデンなどの庭園に足を運べば日本の庭園との違いやあまりにも違う規模に気づくことができた。

このように普段なかなか経験できないことをたくさんできたことは非常に大きな収穫だったが、個人の研究に関しては正直不本意な結果となってしまった。具体的には目的としていたコックニーを適用した **ATM** を見つけられなかったことやインタビューの失敗などが挙げられる。今振り返ると、事前学習の詰め甘さや環境・治安に対して考慮があまり行き届かなかった点など、行く前の準備から既に研修は始まっていたのだと気づき、反省した。しかし自分の納得のいく研究結果は得られなかったとはいえ、外国人とのコミュニケーションに必要な積極性をはじめ、インタビューや研究に欠かせない姿勢や心構えを会得できたという点では、今後活かすことのできる実り多い研修になったと確信している。

150548 早村名奈

私はイギリス研修に行くつもりだったが、最終的に辞退することを決めた。その理由として一番大きかったのはテロだった。決断日が迫ってくる中テロが起き、行きたい気持ちもあったが、海外への期待を次に残しておくという意味を含めてあきらめた。今回行かなかったことで後悔はもちろんあるが、必ずまた海外に行って自分の研究していることに関して調査したいという想いは今も変わっていない。

イギリス研修にはいかなかったが、事前研究や事後研究において学んだことは多くある。その中でも一番得たものは視野を広く持つことである。私は自分の研究対象を英語教育としている。その中で、他のゼミ生の事前研究や研修後の報告を聞くと、どんどん視野が広が

っていくように感じる。すべてが自分の研究につながるとは限らないが、イギリスの階級、文化などを情報として取り入れていくと、自分の研究に向かっていく中で、その視野を取り入れようという考えが自然と浮かぶようになった。

イギリス事前研修や事後研究を通して、多くの情報を得ることができ、自分の研究対象の事のみではなく、多くの情報を取り入れることができ、自分の研究に還元することができると感じた。

150225 菊川奈芳

留学先を決める際、アメリカやヨーロッパなども候補に挙げたが、治安や物価、日本語教育の浸透などの面を考えてオーストラリアの教育都市と言われているメルボルンに決定した。オーストラリアに来てからこれまでの4か月間、様々な活動を通して日々異文化を体験している。特に現在参加している日本語教師アシスタントのインターンシップでは、ネイティブの英語やオーストラリアの田舎ならではの文化だけでなく、もともと興味があった海外での日本語教育についても学ぶことができ、とても充実している。

オーストラリアの学校生活は日本と全然違い、スクールバスで登校したり、生徒全員が自分のパソコンを持参していたり、放課後に先生たちがビールを飲んでいたり、驚くことがたくさんあった。最初はあまりの差異に戸惑うことが多かったけど、最近りんごを丸かじりしながら先生たちと談笑するくらいにはオーストラリアの文化に馴染んできている。

日本語の授業では、今まで当たり前だと思って深く考えたこともないようなことを質問されることが多く、日本語の難しさや面白さについて改めて気づくことができた。生徒たちは日本に興味津々で、とても素直でフレンドリーに接してくれてすぐにいい関係を築くことができた。

残りの期間では、この恵まれた環境を生かして英語力を高めるとともに、多くの人々に日本の魅力を伝えていきたい。

2017 年度
イギリス文学・文化論ゼミ
海外語学研修・フィールドワーク 報告書

2018 年 3 月 31 日発行

監 修 加藤 千博
編 者 横浜市立大学 国際総合科学部 国際教養学系 国際文化コース 加藤ゼミ 3 年生
発行者 〒236-0027 横浜市金沢区瀬戸 22-2 加藤ゼミ
電話 045-787-2256
